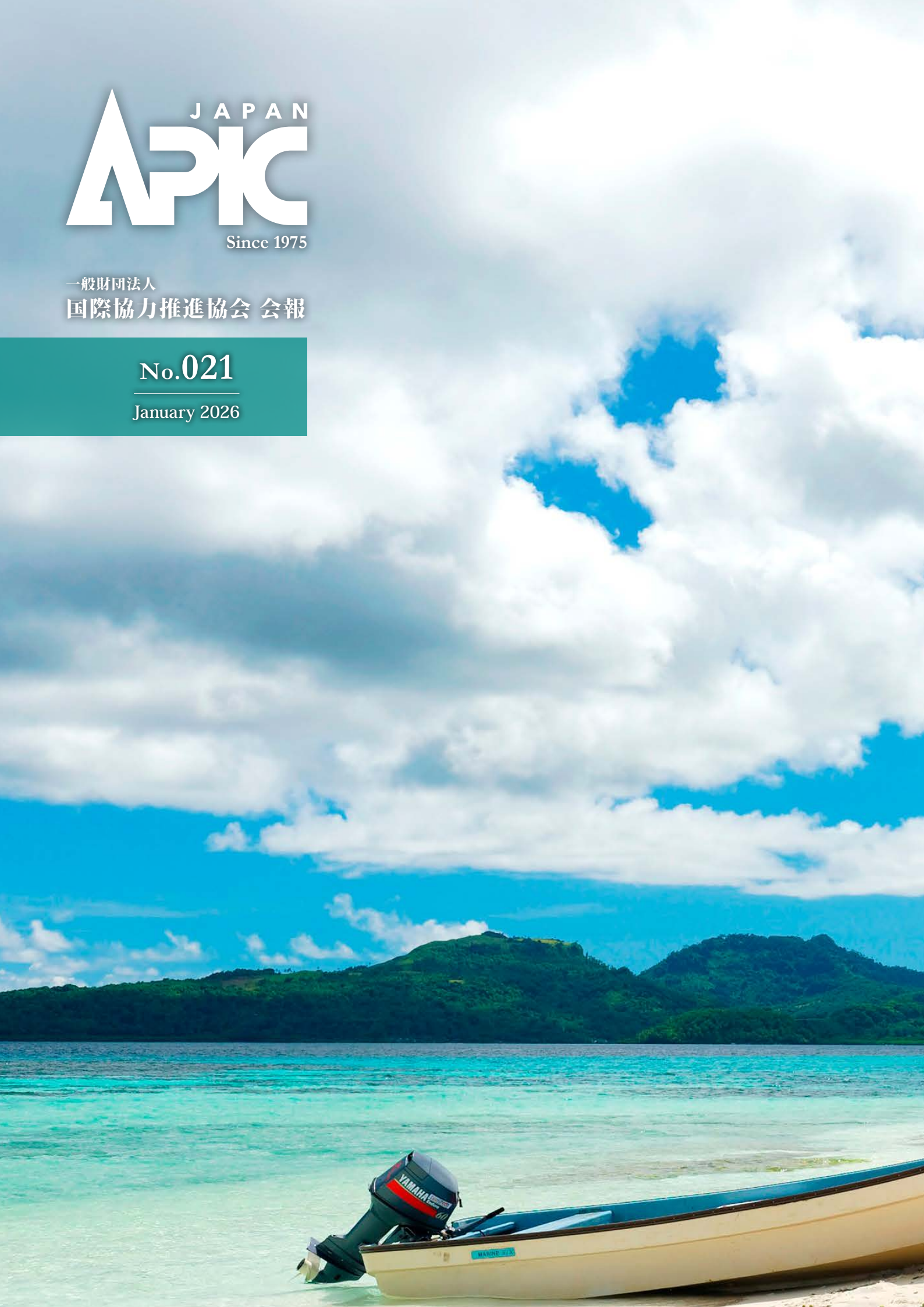




一般財団法人
国際協力推進協会 会報

No.021

January 2026



CONTENTS

01	ごあいさつ
03	第 1 期 APIC-UWI 留学生が上智大学大学院を卒業 INTERVIEW ニキータ・クナール さん
05	太平洋・カリブ事業
09	太平洋・カリブ学生招待計画 2025
10	2024 年度「太平洋・カリブ学生招待計画」参加者が大阪・関西万博のスタッフとして再来日
13	太平洋・カリブ記者招待計画 2025
16	太平洋事業
17	バヌアツにて PIC との初の合同環境セミナーを開催
20	カリブ事業
21	ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援 2025
23	カリブ諸国・リーダー招待計画 西インド諸島大学・学長招待計画
25	INTERVIEW
27	田中一成 APIC 常務理事（前駐マーシャル諸島共和国大使）
28	留学生支援事業
30	第 10 期ザビエル留学生と第 3 期 APIC-UWI 留学生が上智大学／大学院に入学 「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い
32	「バルバドス 歴史の散歩道」（その 7） 第 5 部 砂糖、ラム酒、そして奴隷 寄稿：品田 光彦 元 駐バルバドス日本国大使
34	講演会事業
35	APIC 早朝国際情勢講演会
36	令和 6 年度（2024 年度）事業報告書
37	APIC 役員名簿



新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年は、1 年が瞬く間に過ぎた年でした。世界がトランプ関税等に翻弄されました。ウクライナでのロシアによる戦争や中東での戦闘で多くの人々が犠牲になりました。残念乍ら、2025 年は国際秩序の危機の年として歴史に残るように思われます。本年は11月に米中間選挙があります。新年が、少しでも平和で、国際協力が少しでも進む年になるよう願わずにはおれません。

当協会の活動は、国際航空運賃の大幅な値上がり等はあるも、通常の活動を行うことができました。これも、多くの方々のご支援、ご協力の賜物です。厚くお礼を申し上げます。

9 月には、初めてバヌアツで環境セミナーを開催しました。上智大の織朱實先生にご参加頂き、国際機関太平洋諸島セン

ターの企業訪問団との協力開催の下に、現地政府や企業関係者と環境対策や両国のビジネス協力等の推進につき有益な議論をすることができました。


太平洋島嶼国やカリブ諸国からの留学生招聘は、当協会にとり大変重要な活動です。その内、ミクロネシアのザビエル高校卒業生の留学事業では、現在6名が上智大学で勉強しています。この支援は基本的に皆様方のご寄付で可能となっているものです。厚くお礼を申し上げます。

我々の活動の半分は、カリブ諸国との交流事業です。秋には、カリブから3名のジャーナリストが訪日、太平洋島嶼国からの2名の参加者と合同で、関西にも行きました。滞日中、また帰国後も我が国の紹介記事がペーパーやネットで発信されました。11月には、西インド諸島大学モナ校（ジャマイカ）のウィリアムズ学長一行の訪日をホストしました。

これらの活動の実施に当たっては、関係在京大使等とも緊密に協力しています。過去6年、大変お世話になったジャマイカのショナー・ケイ・リチャーズ大使が新年早々離任されます。素晴らしい大使とご一緒に仕事できたことは当協会にとり大きな喜びと光栄でした。そのお人柄と日本でのご活躍は多くの日本人に強い印象を残しました。益々のご活躍をお祈り申し上げます。

2026年1月

一般財団法人国際協力推進協会（APIC）
理事長
重家 俊範



APIC の主な動き [2025 年 5 月～ 12 月]

5 月	第 417 回早朝国際情勢講演会 (講師：前駐エジプト特命全権大使 岡 浩 氏)	9 月	第 420 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省国際法局長 中村 和彦 氏)
	ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援		太平洋・カリブ記者招待計画
6 月	第 418 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省中南米局審議官 高橋 美佐子 氏)		第 1 期 UWI 留学生が上智大学大学院を卒業
	太平洋・カリブ学生招待計画		第 10 期ザビエル留学生と第 3 期 UWI 留学生が上智大学／大学院に入学
7 月	第 419 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務審議官 (経済) 赤堀 毅 氏)	10 月	第 421 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省アジア大洋州局長 金井 正彰 氏)
		11 月	西インド諸島大学・学長招待計画
			第 422 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省軍縮不拡散・科学部長 中村 仁威 氏)
		12 月	第 423 回早朝国際情勢講演会 (講師：外務省アフリカ部長 今福 孝男 氏)

第1期APIC・UWI留学生が 上智大学大学院を卒業



ニキータ・クナール さん（第1期 APIC-UWI 留学生）

『カリブの宝石』とも呼ばれるバルバドス出身で、セント・ジューズ教区の西海岸で育ちました。幼いころから芸術と科学の両方に親しみ、時には歌唱や作曲などの音楽活動も通じて、創造的な表現力やコミュニケーション力を育んできました。西インド諸島大学で化学と環境科学を学び（2022年卒）、その後、上智大学大学院で地球環境学の修士号を取得しました（2025年卒）。創造的・科学的な両方の視点を生かして、人と環境の双方に配慮しながら、持続可能性に貢献したいと考えています。」

1. 上智大学大学院で学ぼうと思った理由と、研究内容について教えてください。

私は、環境問題とその解決策を政策決定者や産業界のリーダー、地域社会に伝えることのできる科学者として、地球規模の持続可能性に貢献したいという長年の関心をさらに追求するために、上智大学大学院で学ぶことを選びました。この目標を実現するには、自分がこれまで培ってきた化学や環境科学の基礎を超えて、持続可能で意義ある変化を生み出すために重要な他分野にも関わる必要があると感じていました。

上智大学大学院地球環境学研究科には、分野横断的な教育アプローチと、多様で国際的なコミュニティがあることに強く惹かれました。このような環境で学ぶことで、持続可能性の課題を多角的に考察し、より強靱で公平な未来を実現す

るための包摂的なアプローチに貢献するためのスキルと視点を身につけられると信じました。

2. 日本での学生生活（授業以外にも含めて）で印象的だったことは？

日本での学生生活は、学問的な厳しさと文化的な発見が融合した、非常に充実した時間でした。修士論文では、ラテンアメリカおよびカリブ地域におけるクルーズ船の公正な脱炭素化への道筋をテーマに研究を行いました。地球環境学研究科での学ぶ中で、講義やフィールドワークを通じて多様な分野に触れる機会を得たことで、研究手法を磨き、将来に生かせる貴重なスキルを身につけることができました。フィールドワークでは、日本の歴史と、それが環境とどのように結びついているのかに対する理解も、より深めることができました。

授業の外では、同じ専攻の仲間たちと強い絆を築き、互いの考えを交換し合い、多様な視点から学ぶことができました。

APIC・UWI奨学金は学業を支援してくれただけでなく、日本文化を体験し、カリブ、太平洋、日本の素晴らしい人々と出会う貴重な機会も与えてくれました。

一方で、短期的には一度母国に戻り、持続可能な開発の推進や、より持続可能な未来への移行を支えるなど、できるかたちで自国に貢献したいと考えています。

7. これから日本に留学する学生へのメッセージやアドバイスをお願いします。

日々の小さな一歩の積み重ねが未来を形づくることを忘れず、集中を保ち、常に最善を尽くすよう努めてください。新しい挑戦を試みることや失敗を経験することを恐れる必要はありません。そうした瞬間こそ、自分自身についてより深く知り、周囲の世界をより深く理解するための貴重な機会となるはずです。

5. APIC・UWI奨学金制度について、第1期生としてどのように感じていますか？

APIC・UWI奨学金は、私の学業全体を通して欠かせない支援を提供してくれました。この奨学金がなければ、このような素晴らしい機会に恵まれることはなかったでしょう。第1期生として選ばれたことを心から光栄に思うとともに、この奨学金を実現するために尽力されたすべての組織や関係者の皆様のご期待に応えられたことを、心から願っております。

6. 今後の目標について教えてください。

私は今後、研究をさらに発展させる機会を探し、長期的な目標の一環として博士課程への進学も視野に入れています。

した。彼らとは今後も続く深い絆を築くことができました。

また、持続可能な技術への関心がきっかけとなり、東京ビッグサイトで開催されたイベントにも参加しました。これは、日本での留学生活の中でも特に印象に残っている出来事の一つです。そこでは、エネルギーシステムから日常の創造的な解決策に至るまで、数々の革新的な取り組みに触れ、日本が環境問題にいかに関心を持って取り組んでいるかを改めて実感し、大きな感銘を受けました。

個人的な時間には、春の桜から秋の紅葉まで、日本の四季折々の美しさを写真に収めることを楽しみました。そうした時間は、日々の生活に安らぎとインスピレーションを与えてくれました。総じて、日本で過ごした時間は、研究、文化交流、そして人との深いつながりが融合した、私の将来に大きな影響を与え続ける変革的な経験となりました。

3. 日本滞在中、最も心に残っている出来事は何ですか？

私が日本滞在中に最も心に残っているのは、神奈川県葉山という地域を訪れたときのことです。そこでは、地域住民や漁師の方々が中心となって進めてい

る、海底の再生や古民家の保存など、さまざまな持続可能な地域プロジェクトについて学ぶ機会がありました。子どもたちへの海の生き物について、対話と実際の活動を通じて教える姿は、とても印象的でした。また葉山はどこか故郷を思い出させる場所でもありました。海岸や桟橋の景色は、バルバドスのセント・ローレンス・ギャップにある入り江を思い出させ、色とりどりの漁船が並ぶ光景に、懐かしさと深いつながりを感じました。

4. 上智大学や日本に来て良かったと思うこと、達成できたことはありますか？

上智大学大学院地球環境学研究科で学んで最も価値があったのは、学際的な枠組みの中で自分の能力を高め、国際的に多様なコミュニティと交流できたことです。日本における持続可能性やテクノロジーへの革新的な取り組みを体験したことで、環境問題に対する理解がさらに深まり、持続可能性の課題を多角的に考察するための視点を養うことができました。この経験を通して、より強靱で公平な未来を築くための包摂的なアプローチに貢献する力を身につけるといって、自身の中心的な目標を達成し始めています。



上智大学の卒業式にて

太平洋・カリブ 学生招待計画

Student Invitation Program

2025



2025年6月29日から7月24日までの約3週間、太平洋・カリブ地域から計10名の大学生を招待しました。このプログラムは、日本についての理解を深めるとともに、国際的な交流を促進することを目的としています。招待された学生たちは、日本滞在中、上智大学の短期プログラム「Summer Session in East Asian Studies」(以下、Summer Session)に参加し、週末にはAPIC主催の観光ツアーを通じて日本文化を体験しました。これにより、参加者は学びと共に、異なる文化背景を持つ学生たちとの交流を深め、日本の多様な社会を直接体感する機会を得ました。

プログラム概要

この招待計画は、夏季に実施されるのは今年で3回目となり、冬季プログラムと合わせて通算8回目の開催となります。今回の参加学生は、太平洋地域から5名(フィジー、トンガ、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島)、カリブ地域から5名(ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドス、アンティグア・バーブーダ)です。

学生たちは、7月1日から22日ま



1. 江戸切子体験 2. 香取神宮を参拝 3. 三菱みなとみらい技術館 4. カップヌードルミュージアム

週末の日本文化体験

週末には、APIC主催の観光ツアーが行われました。7月5日には都内観光を実施し、都内を一望できるオープントップバスツアー、江戸切子体験、浅草を訪問し通じ、東京の「伝統とモダン」が共存する魅力を体感しました。江戸切子体験では、それぞれ

が工夫を凝らしオリジナルのグラスを完成させました。

7月12日には、株式会社エヌアイデの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れました。現地では、千葉県立佐原高等学校の生徒たちと交流し、香取神宮を参拝、学業成就のご祈禱を受けました。その後、「佐原の大祭 夏祭り」を見学し、山車会館で歴史を学ぶなど、

地域文化への理解を深めました。屋台での買い物や「小江戸」と呼ばれる町並みの散策を楽しむ姿も見られ、交流の最後にはSNSを交換して今後のつながりを約束する学生もいました。

また本訪問には、2017年の本招待計画を契機に再来日し、現在は筑波大学大学院で学ぶボビー・スウクーさんも参加。自身の経験を踏まえ、日本の大学院進学やJETプログラム参加を検討している学生たちへアドバイスを送りました。

7月19日には、横浜を訪れました。三菱みなとみらい技術館、横浜中華街、カップヌードルミュージアム、コスモワールドといった多様なスポットを巡る一日でした。特に三菱みなとみらい技術館とカップヌードルミュージアムでは日本の技術力・発明という部分に大変興味を持ち、真剣に見学している姿が印象的でした。

駐日ジャマイカ大使館へ表敬訪問

APICの活動について理解を深めていただくという観点から、カリブ5か国からの学生は揃って駐日ジャマイカ大使館を表敬訪問しました。滞在中の学びや日本の規律正しさや佇む寂び



駐日ジャマイカ大使館を表敬訪問

といった概念といった日本への印象を共有していました。リチャーズ駐日ジャマイカ大使からは、学生たちには将来、日本とのかけ橋として活動してほしいと激励があり、学生にとって大きな励みとなりました。

修了式・フェアウェルパーティー

プログラム最終日には、上智大学にて修了式とフェアウェルパーティーが開催されました。修了式では、APIC重家俊範理事長および杉村美紀上智大学学長が挨拶があり、続いて学生たちによるSummer Sessionでの受講授



杉村上智大学学長による挨拶

業、日本で訪れた場所、自国との比較などの滞在中に受けた知的刺激についてのプレゼンテーションを行いました。その後、重家理事長から学生一人ひとりに修了証書が手渡されました。フェアウェルパーティーでは、重家理事長による開会の後、来賓としてデヴィタ・スカ・マンガシ駐日トンガ王国大使乾杯より乾杯のご発声をいただきました。トンガの学生による伝統舞踊の披露も行われ、マンガシ大使も飛び入り参加し会場は温かな一体感に包まれました。最後は全学生名残惜しうに、最後の交流を楽しんでいました。

このプログラムを通じて、参加学生は日本の文化や社会に触れ、国際的な視野を広げることができました。今後、各国の若者が日本との友好関係をさらに深め、相互理解の輪を広げていくことを期待しています。



修了式にて



トンガの学生とマンガシ大使による伝統舞踊の披露

参加した学生の声

プログラムに参加した 10 名の学生のうち、4 名の感想文を掲載しています。
(APIC による仮訳)



ジャマイカ

クリストファー・ビーソン さん
Mr. Christopher Beason
西インド諸島大学 グローバル校
University of the West Indies
(Global Campus)



(本人右下)

ジャマイカを離れ、APIC の「学生招待計画」で東京に向かったとき、何か新しいことに向かっているのだとは思っていましたが、これほど自分自身が変わる経験になるとは予想していませんでした。約 3 週間半の滞在中、上智大学で学び、世界中から来た人々と出会い、日本文化の奥深さを体感しながら、まったく異なる世界にどっぷり浸かっている自分に気付きました。

東京は、これまで訪れたどの都市とも違って私を迎えてくれました。東京は、活気にあふれつつも整然とした不思議な街で、朝日は午前 4 時半に昇り、また、使いこなせるようになるには少し時間がかかりましたが非常に効率的な鉄道システムがあります。文化の違いはすぐに実感しました。日本人のコミュニケーションは間接的で落ち着きがあり、感情をあまり表に出さないため、私が普段慣れているやり方とはまったく異なっていました。誰も感情を露わにせず、そのため、特に慣れない場面で自分をどのように表現するかについて、より深く考えさせられました。

上智大学では、東アジアにおけるビジネスとテクノロジーを学びました。日本やシンガポールのような国々が、国家の発展の手段として教育をどのように活用しているかを知ることができ、大変興味深かったです。特に日本の「カイゼン（改善）」や「面子を重んじる考え方」という概念にとっても興味を惹かれました。どちらも、イノベーションと対人関係における敬意が密接に結びついていることをよく示している考え方です。「比較で見る日本経済」の授業では、分析力だけでなく、過去の経済的失敗や、将来の政策を立てる際に避けるべき点についても学ぶことができました。「ジャパニフィケーション（Japanification）」という考え方は特に印象に残っており、特に高齢化や少子化といった日本と同様の課題に直面しているジャマイカの将来戦略を考える際に非常に参考になるものでした。

中でも、最も印象的だった授業は、田中先生の「日本語と文化」でした。ジェスチャーや礼儀、断り方、文化的な習慣を学び、すぐに教室外でも実践することで、日本人に対する新たな敬意が生まれました。そのおかげで、東京での行動もより意識的に、謙虚な気持ちで過ごすことができました。

教室の外では、世界各国からの友達もできました。アメリカ、フィンランド、アルゼンチン、南アフリカ、ポルトガル、そして日本の友達です。彼らのおかげで、今回の旅は忘れられないものになりました。ほぼ毎晩、新しい料理に挑戦し、特に路地裏のラーメン店で地元の人たちと肩を並べて食べるのが楽しかったです。どの料理も美味しくて安く、日本でのお土産や買い物とても手頃でした。

他にも心に残っている経験として、SHIBUYA SKY（渋谷スカイ）の屋上から街を見下ろし、そこにいてだけで幸運だと感じたことや、ふるさと東京応援祭で地元の人々と踊り、エネルギーと喜びに満ちた雰囲気、に圧倒されたことがあります。予想外に、日本には楽しさとリズムにあふれた一面があるのだと感じました。

明治神宮を訪れた際に、おみくじで「諦めずに進め。試練の時期があっても、やり遂げることができる」という言葉を引き心に誓いたことも、絶対に忘れません。神社の雰囲気はとても穏やかでした。APIC が企画してくれた週末のフィールドトリップも素晴らしく、特にカップヌードルミュージアムや江戸切子体験が印象的でした。また、浅草で出会った地元の方が、私の予想以上にジャマイカについて詳しく、かつたことも覚えていて、家から遠く離れた場所にいながら、こんなにも自分を理解してくれる人がいると感じられ、不思議な体験でした。

この旅はただ勉強するためだけではなく、自分自身を成長させる機会でもありました。人や感情、文化、ビジネスの見方まで変えてくれて、必要だとは知らなかったツールを手に入れることができました。学びは必ずしも教室で起こるものではなく、時には会話の中、電車の中、あるいは東京の路地裏でラーメンを食べているときにも起こることを実感しました。

この忘れられない経験を通じて、APIC の皆さまの親切さ、丁寧なサポート、そして惜しみないご厚意に、心より感謝申し上げます。また、この機会を与えてくれた UWI にも深く感謝しています。この経験は、さまざまな形で私に変化をもたらし、そこで得た学びをこれからの人生において忘れずに生かしていきたいと思います。



アンティグア・バーブーダ

アジャンテ・フレイザー さん
Mr. Ajanté Fraser
西インド諸島大学 ファイブアイランズ校
University of the West Indies
(Five Islands Campus)



(本人右下)

日本での時間は、本当に非日常的で特別な体験でした。APIC を通じて上智大学で学ぶ機会は、これまでで最も貴重な経験の一つです。教室で日本社会について学ぶだけでなく、実際にその社会を体験できたことは、とても有意義でした。特に、APIC が主催してくれた週末のアクティビティでは、日本の生活のさまざまな側面を直接体験することができ、大変楽しかったです。また、講義も非常に充実しており、特に「現代日本社会」を担当されたサラディン教授の授業には深く感銘を受けました。日本の文化や食べ物、独自の社会構造はいずれも強く印象に残っています。

さらに、この体験を太平洋・カリブ地域の仲間たちと共有できたことが、より意義深いものになりました。多様なバックグラウンドを持つ学生たちとの交流は、学びや意見交換、友情の豊かな場となりました。仲間たちの視点から多くを学ぶことができ、一緒に作った思い出は一生大切にしたいと思います。日本での経験は、日本という国について学ぶだけでなく、出会った人々や築いたつながりを通して、自分自身を成長させる機会にもなりました。

これまでで最も有意義な投資は、APIC とともに歩んだ私の旅です。APICのおかげで、太平洋から東アジアへと移動し、人生の出来事をこれまでとは異なる視点から見つめ、考え方を変えることができました。私の南太平洋大学での講師の一人は、社会学的な視点の典型例を説明する際に、よく日本を取り上げます。ポップカルチャーやアイデンティティの再現、そして他にも色々なことについて詳しく知ることができます。まるで自分が映画の中にいるようで、教室で学んできたことを実際に体験するために、いつか日本に行きたいとずっと夢見ていました。日本への憧れと好奇心に胸を膨らませていたのです。日本に到着すると、そこにはまさに想像していた通りの光景が広がっていました。高層ビル、美しい光に彩られた橋、きらめく色とりどりのライトや信号機、そして見覚えのある東京スカイツリーや東京タワー。映画や雑誌でしか見たことがなかった景色が、30 分も経たないうちに目の前で現実となったのです。

私はただ好奇心に駆り立てられ、心を開いて講義を受けました。伝統舞踊や現代文化、伝統的な料理や飲み物、箸の使い方など多くを学びましたが、なかでも日本の教育制度について学んだことが、今回の旅の最大の収穫でした。週末のフィールドトリップでは、教室での理論と社会インフラや現実がどのように結びついているかを目の当たりにしました。日本では、男女ともに教養があり、協調性を持ち、健康であることが求められています。博物館の多くも、その理想を子どもたちに伝える目的で作られているように思います。例えば、横浜の「カップヌードルミュージアム」は、子どもたちが幼いころから健康的な食事の作り方や食べ方を学べるように作られています。日本は「模範を示すこと」で人々を導いており、それこそが「生きがい」の一種なのだと感じました。多少の失敗があっても、常に「侘び寂び」のように良い面に目を向ける姿勢があるのです。

APIC のプログラムは国際協力や外交関係の強化を目的としていますが、私にとっては、太平洋地域などで起きている地域課題への向き合い方そのものを変えてくれる経験でもありました。学術的な知識だけでなく、社会的にも豊かな知識と知恵を得ることができました。日本滞在中、瞬間に起こるさまざまな出来事に対して、より愛情深く、思いやりを持ち、好奇心を抱くようになりました。佐原高校の生徒たちと交流したとき、彼らは限られた英語で一生懸命コミュニケーションを取ってくれました。APIC のプログラムは、自己を振り返り、人と人との関わりを新たに築き直すきっかけを与えてくれるものだと感じました。日本には最先端の技術や革新的な発明がありますが、伝統を手放すことはありません。むしろ、その伝統的な知識が多くの社会問題の解決につながっているのです。日本は、現代と伝統をうまく融合させ、社会・経済・環境の課題に挑戦しています。特に東京という大都市においても、文化や伝統が今なお息づいている点に強く感銘を受けました。

私は「モアナ（太平洋）」の仲間たちに、ぜひ日本を訪れ、上智大学で学び、日本の文化と社会を体験することを強く勧めたいと思います。

夢はしばしば、心の中のささやきのように静かに始まり、やがて現実になるものです。私にとって、その瞬間は、二人の子どもを抱きしめて別れを告げ、日本行きの飛行機に乗ったときに訪れました。子どもと離れるのも初めて、一人で旅するのも初めて、そしてパラオの海岸からこれほど遠くまで行くのも初めてでした。不安と希望が入り混じる中で、この機会は私だけのものではなく、子どもたちのためでもありました。成長し、学び、未来を形作る物語や教訓を持ち帰るチャンスでもあったのです。家族の励ましと神の恵みに支えられ、勇気を振り絞って、私の人生を変える旅が始まりました。

成田空港に降り立ったとき、午後の太陽がまだ東京の街を明るく照らしていました。すべてに圧倒されるほどでありながら、希望に満ちていると感じました。電車は完璧なリズムで動き、街は果てしなく広がり、目にするすべての標識が、ここが故郷から遠く離れた場所であることを思い出させました。それでもほどなくして安心感を得られたのは、場所ではなく、出会った人々のおかげでした。

平日は上智大学で過ごし、私の考え方を揺さぶり、視野を広げてくれる講義に没頭しました。世界各国から集まったクラスメイトに囲まれ、教授陣からだけでなく、仲間の語る体験や視点からも多くを学びました。毎日がより大きな世界への一歩のように感じられ、深く学び、故郷に有意義なものを持ち帰る責任を心に抱いていました。

週末はまるで歴史や文化の生き一冊の本の中に足を踏み入れるような冒険の連続でした。ある土曜日には、2 階建てオープントップバスで東京を巡り、写真でしか見たことのなかった皇居、国会議事堂、東京タワー、そして時を超えて立つ浅草寺などの観光名所を眺めました。横浜では中華街やカップヌードルミュージアム、コスモワールドを訪れました。自分だけのカップヌードルをデザインし、小さな「故郷の象徴」を持って歩いて楽しかったです。佐原では高校生たちと昼食や夕食を共にし、お互いの生活について語り合いました。江戸時代の雰囲気が残る運河と一緒に歩き、佐原の大祭に参加する中で、伝統の静けさと祭りの喜びを同時に感じました。その日は笑い声と屋台の味、そして心からの交流に満ちていて、文化交流の本当の目的である「理解と友情の架け橋を築くこと」を思い出させてくれました。

しかし、この旅を本当に形作ったのは、訪れた場所だけではなく、そこで出会った人々でした。共に電車の乗り換えに挑戦し、食事を分け合い、永遠に大切にしたい思い出を作りました。夜遅くまで語り合ったり、迷子になって一緒に道を探したり、コンビニでおにぎりを食べたり——そんな何気ない瞬間に、異国の地でも居場所を見つけたのです。彼らはもはや「将来の友人」だけではなく、日本で出会った家族のような存在になりました。

私を信じ、この素晴らしい機会を与えてくださった APIC、日本大使館、そしてパラオ・コミュニティ・カレッジに心から感謝しています。彼らの支えがあったからこそ、この旅は実現しましたし、信頼や励まし、コミュニティの力の大切さを改めて感じました。子どもたちのもとへ帰る今、感謝の気持ちを胸に抱きながら、かつて心の奥でささやいた夢が、今や生き生きとした思い出として私の人生に刻まれていることを実感しています。



トンガ

マティーナ・カイトプ さん
Ms. Matina Kaitapu
南太平洋大学
University of the South Pacific



これまでで最も有意義な投資は、APIC とともに歩んだ私の旅です。APICのおかげで、太平洋から東アジアへと移動し、人生の出来事をこれまでとは異なる視点から見つめ、考え方を変えることができました。私の南太平洋大学での講師の一人は、社会学的な視点の典型例を説明する際に、よく日本を取り上げます。ポップカルチャーやアイデンティティの再現、そして他にも色々なことについて詳しく知ることができます。まるで自分が映画の中にいるようで、教室で学んできたことを実際に体験するために、いつか日本に行きたいとずっと夢見ていました。日本への憧れと好奇心に胸を膨らませていたのです。日本に到着すると、そこにはまさに想像していた通りの光景が広がっていました。高層ビル、美しい光に彩られた橋、きらめく色とりどりのライトや信号機、そして見覚えのある東京スカイツリーや東京タワー。映画や雑誌でしか見たことがなかった景色が、30 分も経たないうちに目の前で現実となったのです。

私はただ好奇心に駆り立てられ、心を開いて講義を受けました。伝統舞踊や現代文化、伝統的な料理や飲み物、箸の使い方など多くを学びましたが、なかでも日本の教育制度について学んだことが、今回の旅の最大の収穫でした。週末のフィールドトリップでは、教室での理論と社会インフラや現実がどのように結びついているかを目の当たりにしました。日本では、男女ともに教養があり、協調性を持ち、健康であることが求められています。博物館の多くも、その理想を子どもたちに伝える目的で作られているように思います。例えば、横浜の「カップヌードルミュージアム」は、子どもたちが幼いころから健康的な食事の作り方や食べ方を学べるように作られています。日本は「模範を示すこと」で人々を導いており、それこそが「生きがい」の一種なのだと感じました。多少の失敗があっても、常に「侘び寂び」のように良い面に目を向ける姿勢があるのです。

APIC のプログラムは国際協力や外交関係の強化を目的としていますが、私にとっては、太平洋地域などで起きている地域課題への向き合い方そのものを変えてくれる経験でもありました。学術的な知識だけでなく、社会的にも豊かな知識と知恵を得ることができました。日本滞在中、瞬間に起こるさまざまな出来事に対して、より愛情深く、思いやりを持ち、好奇心を抱くようになりました。佐原高校の生徒たちと交流したとき、彼らは限られた英語で一生懸命コミュニケーションを取ってくれました。APIC のプログラムは、自己を振り返り、人と人との関わりを新たに築き直すきっかけを与えてくれるものだと感じました。日本には最先端の技術や革新的な発明がありますが、伝統を手放すことはありません。むしろ、その伝統的な知識が多くの社会問題の解決につながっているのです。日本は、現代と伝統をうまく融合させ、社会・経済・環境の課題に挑戦しています。特に東京という大都市においても、文化や伝統が今なお息づいている点に強く感銘を受けました。

私は「モアナ（太平洋）」の仲間たちに、ぜひ日本を訪れ、上智大学で学び、日本の文化と社会を体験することを強く勧めたいと思います。



パラオ

ブリチット・イデルケイ さん
Ms. Britchet Idelkei
パラオ短期大学
Palau Community College



夢はしばしば、心の中のささやきのように静かに始まり、やがて現実になるものです。私にとって、その瞬間は、二人の子どもを抱きしめて別れを告げ、日本行きの飛行機に乗ったときに訪れました。子どもと離れるのも初めて、一人で旅するのも初めて、そしてパラオの海岸からこれほど遠くまで行くのも初めてでした。不安と希望が入り混じる中で、この機会は私だけのものではなく、子どもたちのためでもありました。成長し、学び、未来を形作る物語や教訓を持ち帰るチャンスでもあったのです。家族の励ましと神の恵みに支えられ、勇気を振り絞って、私の人生を変える旅が始まりました。

成田空港に降り立ったとき、午後の太陽がまだ東京の街を明るく照らしていました。すべてに圧倒されるほどでありながら、希望に満ちていると感じました。電車は完璧なリズムで動き、街は果てしなく広がり、目にするすべての標識が、ここが故郷から遠く離れた場所であることを思い出させました。それでもほどなくして安心感を得られたのは、場所ではなく、出会った人々のおかげでした。

平日は上智大学で過ごし、私の考え方を揺さぶり、視野を広げてくれる講義に没頭しました。世界各国から集まったクラスメイトに囲まれ、教授陣からだけでなく、仲間の語る体験や視点からも多くを学びました。毎日がより大きな世界への一歩のように感じられ、深く学び、故郷に有意義なものを持ち帰る責任を心に抱いていました。

週末はまるで歴史や文化の生き一冊の本の中に足を踏み入れるような冒険の連続でした。ある土曜日には、2 階建てオープントップバスで東京を巡り、写真でしか見たことのなかった皇居、国会議事堂、東京タワー、そして時を超えて立つ浅草寺などの観光名所を眺めました。横浜では中華街やカップヌードルミュージアム、コスモワールドを訪れました。自分だけのカップヌードルをデザインし、小さな「故郷の象徴」を持って歩いて楽しかったです。佐原では高校生たちと昼食や夕食を共にし、お互いの生活について語り合いました。江戸時代の雰囲気が残る運河と一緒に歩き、佐原の大祭に参加する中で、伝統の静けさと祭りの喜びを同時に感じました。その日は笑い声と屋台の味、そして心からの交流に満ちていて、文化交流の本当の目的である「理解と友情の架け橋を築くこと」を思い出させてくれました。

しかし、この旅を本当に形作ったのは、訪れた場所だけではなく、そこで出会った人々でした。共に電車の乗り換えに挑戦し、食事を分け合い、永遠に大切にしたい思い出を作りました。夜遅くまで語り合ったり、迷子になって一緒に道を探したり、コンビニでおにぎりを食べたり——そんな何気ない瞬間に、異国の地でも居場所を見つけたのです。彼らはもはや「将来の友人」だけではなく、日本で出会った家族のような存在になりました。

私を信じ、この素晴らしい機会を与えてくださった APIC、日本大使館、そしてパラオ・コミュニティ・カレッジに心から感謝しています。彼らの支えがあったからこそ、この旅は実現しましたし、信頼や励まし、コミュニティの力の大切さを改めて感じました。子どもたちのもとへ帰る今、感謝の気持ちを胸に抱きながら、かつて心の奥でささやいた夢が、今や生き生きとした思い出として私の人生に刻まれていることを実感しています。

太平洋・カリブ 記者招待計画

APIC Japan Journalism Fellowship

2025



2025年9月26日から10月7日まで、APICは、公益財団法人フォーリン・プレスセンター（FPCJ）の協力のもと、環境・防災・観光をテーマとして、太平洋島嶼国から2名、カリブ諸国から3名の報道関係者の参加を得て、「太平洋・カリブ記者招待計画」を東京、大阪（万博を含む）、神戸、高松に於いて実施しました。

参加者は、フィジー出身でニュージランド・メディアの記者（豪州在住）クリスティン・ロヴオイ氏、トンガからティサ・コカナシガ氏、ベリーズからコートニー・メンジー氏、ジャマイカからラッセル・ロビンソン氏、トリニダード・トバゴからカマリー・ロビンソン氏、加えて、プログラム・コーディネーターとして米国からドーン・マラス氏が参加しました。ベリーズとジャマイカの2名はいずれもTVの記者です。この記者招待計画において、各記者はプログラム・コーディネーターの指導の下、毎日、訪問先での取材を終えた後に確認・打合せを行い、記事を1本以上執筆することが課されています。なお、各訪問先にはAPICの荒木事務局長・理事が同行しました。

今回、一行は、都内のほか、大阪、

私はアシュリー・キンチと申します。バルバドス出身で、昨年の夏、APICの支援により上智大学のサマーセッションに参加するため日本を訪れました。

そして今年、2025年大阪・関西万博で母国バルバドスを代表する機会をいただき、再び日本を訪れました。昨年も大阪を少しだけ訪れましたが、今回は2か月間滞在しました。非常に暑い夏ではありましたが、万博での仕事や休日の時間を通じて素晴らしい経験ができました。

万博で働くことは本当に特別な経験でした。日本の方々だけでなく、様々な国から、毎日多くの来場者がありました。バルバドスは日本からとても遠いため、多くの方々が私の国について質問してくれました。そのたびにバルバドスの魅力を紹介できることがとても嬉しく、皆さんの反応を見るのも楽しかったです。

自国の情報を伝える一方で、日本人の同僚や毎日サポートしてくれたスタッフを通じて、日本についてもたくさん学ぶことができました。これは昨年、上智大学で学んだ内容への理解をさらに深める良い機会となりました。

万博以外の時間には、エキスポシティや大阪城、京都の伏見稲荷などにも足を運びました。日本の建築や自然の美しさには、今回も改めて感動しました。また、大阪歴史博物館では、大阪城や大阪の暮らし、日本の歴史について多くを学びました。

日本で2度の夏を過ごしたことをきっかけに、現在通っている西インド諸島大学（UWI）ケーブルヒル校で、初級の日本語コースを今学期から履修し始めました。これまでの2回の滞在中で出会った日本の友人たちと日本語で会話ができるようになりたいと思っていますし、日本文化に深く浸りたいと感じています。日本語の知識がまだ十分でないので、少し大変なところもあります。

私は心から日本を好きになりました。いつか必ず戻ってきたいと思っています。

神戸、香川県高松市で取材を行いました。本計画は、2015年以降毎年実施してききましたが、コロナ禍のため2020年と2021年は中止した後2022年に再開して、本年度通算9回目の実施となりました。

滞在中の主なスケジュール

9/26 (金)	- 来日
9/27 (土)	- 都内見学・自由日
9/28 (日)	- APIC によるプログラムオリエンテーション - 外務省フリーフィング - 気象庁フリーフィング
9/29 (月)	- 大阪へ移動 - 大阪広域環境施設組合舞洲工場 視察
9/30 (火)	- EXPO2025 視察
10/1 (水)	- 甲子化学工業株式会社 訪問
10/2 (木)	- 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 訪問
10/3 (金)	- 香川県海岸漂着物対策活動推進員（愛称：かがわ海ごみリーダー）取材
10/4 (土)	- 栗林公園（観光）
10/5 (日)	- 自由日
10/6 (月)	- 読売新聞東京本社 訪問 - 原宿はらっぱファーム 視察 - プログラム修了式・APIC 重家俊範理事長主催夕食会
10/7 (火)	- 離日

都内視察とフリーフィング

記者たちは9月26日（金）に訪日し、プログラム・コーディネーターと合流し、FPCJを訪ねて事務手続きを終え、翌27日（土）と28日（日）はそれぞれ都内見学などを行いつつ時差調整・体調管理を行いました。実質的な初日となる29日（月）は、APICにおいてプログラムの全般的な説明を行い、重家理事長から日本の政治（折しも自民党総裁選の直前）、経済情勢、高齢化社会など日本社会の現状、対外的な課題について説明しました。午後、

一行は外務省を訪問し、鈴木律子中南海局長、カリブ課長と岩崎竜司アジア大洋州局長、大洋州課上席専門官から両地域と日本との関係等について説明を受けました。その後、気象庁を訪問し、気象防災オペレーションルームで気象予報、台風のモニタリング業務の説明を、地震火山オペレーションルームで地震観測のモニタリング業務の説明を受け、最後



FPCJ を訪問



日本滞在中の写真。1. 2025 年大阪・関西万博にて 2. 太陽の塔とともに 3. 大阪城にて 4. 京都・伏見稲荷大社

に記者会見室を見学しました。

大阪市のごみ焼却の視察

9月30日（火）は、午前中に新幹線で大阪に移動し、午後、大阪広域環境施設組合舞洲工場（ごみ焼却場）を視察しました。工場の外観は、まるでパルセロナのガウディの作品かと思わせるようなもので驚かせられますが、実は、ウィーンの数画家フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏によりデザインされたものだということで、建物が地域に根ざして、技術・エコロジ・芸術の融和のシンボルとなるように意図されています。大阪市、八尾市、松原市及び守口市が7つのごみ焼却場を保有していて、この舞洲工場はその一つですが、外観にもお金をかけており、総工費は609億円だそうです。施設内の説明を受けながら、参加記者の国のほとんどには焼却炉がないので、非常に関心をもって質問をしていました。



EXPO2025視察

10月1日（水）は、当時開催中のEXPO2025にて参加記者出身国のパビリオンを順次訪問し、自国がどのように対外的に広報しているか、万博とはどういうものかを視察してもらいました。

まず、記者一行は、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会の吉村佐知子広報・プロモーション局上席審議役兼部長から万博の概要の説明を受けました。その後、万博の大屋根リングの外にある「カーボンリサイクルファクトリー見学ツアー」でRIITE（公益財団法人地球環境産業技術研究機構）、大阪ガス、エア・ウォーターの3種類のツアーに参加し、空気中からCO2を回収したり、メタンと混合してエネルギーとして万博会場や近隣の700世帯に供給している施設、また、きれいな水として海洋に放出している施設を視察しました。その後、会場内のブルーオーシャン・ドームで、いかに海洋ごみが増えているかということを学びました。

午後は、記者の出身国が入っているコモンスズ館を順に回りました。各国のブースでは、責任者から説明を受け、



れているのに着目して、産業廃棄物として買い取り、粉碎して、大阪に運搬してプラスチックと混ぜて、ヘルメット（製品名HOTAMET）を製造しており、万博会場でも使用されています。海外へは、「SHELMET」という名前で販売し、今後の事業展開を図りたいということでした。産業廃棄物が再利用されて、製品となることに皆感銘を受けていました。

プラステックと混ぜて、ヘルメット（製品名HOTAMET）を製造しており、万博会場でも使用されています。海外へは、「SHELMET」という名前で販売し、今後の事業展開を図りたいということでした。産業廃棄物が再利用されて、製品となることに皆感銘を受けていました。

午後は、神戸に移動して、まず、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」において、震災がどれほど大きかったか映像を見た後、防災の観点から、ボランティアガイドより、建物の強度についての実験などをしながら、説明がありました。その後、神戸新聞社で、石崎勝伸研修局文化部長より、震災当時は25歳の駆け出しの記者であったが、神戸新聞の本社が崩壊した中で、神戸・芦屋地区の担当となり、大災害の中でどのように報道すべきか等、御自身の体験を交えた説明を

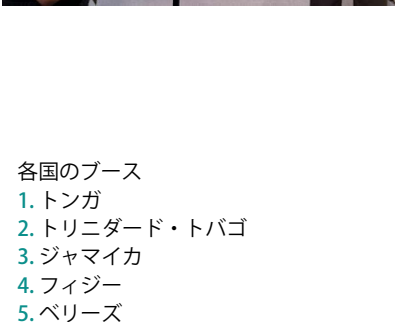
受けました。その年は阪神・淡路大震災が1月に起こり、3月には地下鉄サリン事件が起こって、多くの記者が神戸からいなくなり、サリン事件に関心が移ってしまったこと、神戸新聞は、地元新聞としてその後も関連死や被災者の精神的なダメージなども含めて被災者に寄り添った報道を続け、海外の自然災害にも他社よりも多くの紙面を割いているという説明がありました。参加記者の多くは、30年前には生まれていなかったり、まだ幼少で、大震災の記憶がないため、完全に復興した神戸の街並みを見て、日本でもこのような大災害があったということに驚いていました。



神戸新聞社にて

再び都内での取材およびプログラム修了式

一行は、6日（月）午前、読売新聞東京本社で、中島健太郎国際部次長（前アメリカ総局長）と横堀裕也編集



各国のブース
1. トンガ
2. トリニダード・トバゴ
3. ジャマイカ
4. フィジー
5. ベリーズ



て説明を聞いていました。

ホタテ貝からヘルメット、阪神・淡路大震災の記憶

また、記者もそれぞれインタビューを行い、自国向けの記事を書いて、非常に盛り上がりました。その後、大屋根に上り、半周して会場の全体像を見ました。

また、記者もそれぞれインタビューを行い、自国向けの記事を書いて、非常に盛り上がりました。その後、大屋根に上り、半周して会場の全体像を見ました。

夕方には、会場内の海上部分で、水上を自由に動く床（台船のようなもの）のロボット実証実験を視察しました。自動で海洋ごみを回収したり、例えば、川の渡しを船頭がいなくても自動で運航できるという実験で、皆興味をもった。

夕方には、如水会館においてプログラムの修了式と、続いて、関係者も参加しての重家理事長主催の夕食会を開催しました。

局西部記者に会い、日本の政治状況など、記者同士ということでフランクな議論をしました。中島次長から、読売新聞が日本で一番大きい新聞社であるが、最近はネットでニュースを見る人も多くなって購読者が減少していることや、同社のスタンスなどが説明されました。参加記者から、アメリカではFOX Newsはトランプ支持を明確にしているが、日本の新聞はどうかという質問があり、中島次長から、日本の新聞は政権に偏るということはないという説明がありました。



原宿はらっぱファーム

読売新聞東京本社

重家理事長主催の夕食会にて

バヌアツにてP-I-Cとの初の合同環境セミナーを開催

A P I Cは2025年9月11日（木）から16日（火）にかけて、バヌアツ共和国を訪問し、現地関係機関との協議や環境関連施設の視察を実施するとともに、9月16日に「第6回A P I C太平洋環境セミナー」を開催しました。当初は2025年2月に開催予定でしたが、2024年12月17日に発生した地震の影響により延期され、今回の実施となりました。今回のセミナーは、国際機関太平洋諸島センター（P I C）との初の共催であり、前日15日にP I C主催で行われた「経済セミナー」に続けて開催されたことで、経済と環境を連続して議論する新たな枠組みを築く試みとなりました。

現場視察を通じた課題把握

セミナー開催に先立つ9月12日（金）、訪問団（織朱實 上智大学大学院地球環境学研究科教授、田中一成常務理事、浅野未莉職員）は終日、関係機関訪問



1. JICA バヌアツ支所
2. バヌアツ気候変動省環境保全局
3. マンガリリユー村の養殖場にて

ないまま放置されているため、十分な埋め立て管理が行えず、自然発火が繰り返し発生しているとの報告がありました。こうした状況はダイオキシンの発生など環境・健康リスクにつながる恐れがあり、廃棄物管理における「持続可能な仕組みづくり」が喫緊の課題であることを強く印象づけました。

午後には、マンガリリユー村を訪問し、J I C Aが展開する「豊かな前浜プロジェクト」の現場を視察しました。ここではシャコガイやサンゴの養殖、観光客向けの植え付け体験などを通じて、収益をコミュニティ全体に還元する仕組みが構築されています。2015年のサイクロンで施設が大きな被害を受けた際も、住民が主体的に再建に取り組み、現在では学生や若者も積極的に参加する形で活動が続いています。こうした住民主体の取り組みは、「自然資源を守ることが収益につながり、地域社会を支える」というモデルケースとして、バヌアツにおける環

と現場視察を行い、環境・経済両面にわたる課題と取り組みを把握しました。

最初に訪れたJ I C Aバヌアツ支所では内島光孝所長から2024年12月に発生した地震の影響について説明がありました。地震は観光やホテル産業に深刻な打撃を与えましたが、その後復興に向けた動きが加速し、2025年に入ってからホテルは年内満室というほど観光需要が戻ってきているとのことでした。自然を大切にする国民性や精霊信仰が根付いていることも、観光資源としての強みであり、今後の経済回復の鍵になると強調されました。さらに、青年海外協力隊の活動状況や、ブルーエコノミーを基盤とする新たな技術協力プロジェクトの紹介がありました。特に「豊かな前浜プロジェクト」はマンガリリユー村を拠点に展開されており、2025年4月からは資源保護から「活用と保全の両立」へとシフトすることが期待されています。震災を経て、バヌアツが持つ観光・水産・

境と経済の連携を象徴する事例といえます。

その夜に田中常務理事主催夕食会が開催され、奥田直久駐バヌアツ大使、オズボーン・マレナム・バヌアツ気候変動省環境保全局長も参加しました。翌週の環境セミナーに向け、日本側とバヌアツ側の顔合わせと意見交換の機会となりました。

文化と自然を体感する視察

9月13日（土）、訪問団は奥田大使のご案内により、バヌアツの文化と自然を体験する一日を過ごしました。

朝食後に訪れたバヌアツ国立博物館では、U N E S C O無形文化遺産に登録されている「砂絵」のデモンストレーションを鑑賞しました。物語を語りながら一筆書きで描かれる砂絵は、芸術と口承文化を融合させた独自の表現で



自然資源の価値をいかかにレジャーメントな形で発展させるかが重要なテーマであるとのこと。

続いて訪問したバヌアツ気候変動省環境保全局では、オズボーン・マレナム局長より、廃棄物管理をめぐる喫緊の課題が提示されました。特に埋立地不足やプラスチック廃棄物の急増は深刻であり、地震災害によって瓦礫処理の経験が十分でないことも問題を複雑化させています。こうした制約の中で、限られた予算と人材をどう効率的に活用するか、また「経済性と生態系の両立」をどう実現するかが、政策上の最重要課題であると指摘されました。

午前中の最後には、首都近郊のブツファ最終処分場を視察しました。職員

あり、観光資源としても高い魅力を持っています。その後、車窓からはJ I C Aの無償資金協力によつて建設が進められているテオウマ橋を視察しました。

続いて訪れたPepeyo Cultural Villageでは、伝統的な住居や薬草を用いた医療、農作や漁撈の方法など、地域社会に根付く生活の知恵を学びました。また、伝統的な舞踊や音楽の鑑賞も行い、バヌアツ文化の豊かさに触れました。

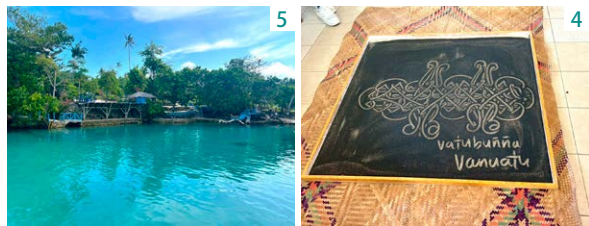
ここで紹介されたカヴァは、収益性の高さから“Green Gold”とも呼ばれており、バヌアツでは輸出も多くされているようです。

午後はBlue Lagoonにてシュノーケリングを体験しました。透明度の高い海と豊かな生態系を実感することで、観光と環境保全を両立させる重要性を改めて認識する機会となりました。

夕刻にはカヴァ・バーを訪れ、バヌアツ郷土料理「ラップラップ」を体験。さらにファイヤーダンスショーを鑑賞し、文化的な一日を締めくくりました。

大使公邸での結団式

翌14日（日）は夕刻から駐バヌアツ



4. 砂絵 5. Blue Lagoon 6. Pepeyo Cultural Villageにて

大使公邸にて、奥田大使主催の立食形式による夕食会兼日本からの参加者結団式が行われました。P I Cの斎藤龍三所長、尾崎氏に加え、株式会社クニエ・南洋貿易・ゴミソリユー・成田空港ビジネス・東京製綱株式会社・扶桑グループ・J i l l e・アークエッジビジネスなど多くの日本企業関係者が出席。奥田大使、P I C、A P I Cからの挨拶に続き、各参加者が自己紹介を行い、成田空港ビジネス宮本社長のスピーチ、P I C斎藤所長の乾杯の辞へと続きました。和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、翌日の経済・環境セミナーに向けたネットワーキングの場として意義を持つ会合となりました。

滞在中の主なスケジュール

9/11（木）	- ポートビラ着 - 在バヌアツ日本大使館 訪問
9/12（金）	- JICA バヌアツ支所 訪問 - バヌアツ気候変動省環境保全局 訪問 - ブッフファ最終処分場 視察 - マンガリリユー村施設 視察 - 田中常務理事主催夕食会
9/13（土）	- 文化と自然の視察（バヌアツ国立博物館、Pepeyo Cultural Village、Blue Lagoon、カヴァ・バー）
9/14（日）	- 奥田大使主催夕食会兼日本からの参加者結団式
9/15（月）	- P I C 主催 経済セミナー
9/16（火）	- 第6回APIC太平洋環境セミナー - ポートビラ発



バヌアツ共和国
Republic of Vanuatu

南太平洋にある約80の島々からなる群島国。1980年に英国とフランスの共同統治下から独立し、イギリス連邦加盟国となった。

面積：12,190km²（新潟県とほぼ同じ大きさ）
人口：327,777人（2024年、世界銀行）
首都：ポートビラ
民族：メラネシア系（93%）、その他中国系、ベトナム系及び英仏人が居住。
言語：ピスラマ語（ピジン英語）、英語、仏語（いずれも公用語）
宗教：主にキリスト教

（基礎データ出展：外務省 HP）

PIC主催 経済セミナー

15日には、PIC主催の「経済セミナー」が The Melanesian Port Vila で開催されました。バヌアツ政府関係者、日本企業、国際機関が一堂に会し、経済と投資の可能性について活発な議論が展開されました。

午前の部では、外国投資促進庁（VFIPA）のレイモンド・ヴテイ長官が登壇し、地政学リスクや2024年の地震による経済への影響を報告。外国投資の現状や政策優先分野（教育、保健、インフラ、ブルーエコノミーなど）について説明がありました。観光局のポール・ピオ氏からは、Air Vanuatu 破綻による打撃を背景に、持続可能な観光への転換の必要性が示されました。JICAの内島所長からは、これまでの支援実績や進行中のインフラ復旧プロジェクト、そして「豊かな前浜、プロジェクト」を含む技術協力について紹介がありました。



PIC主催 経済セミナー

企業がそれぞれの取り組みを発表。廃棄物処理やエネルギー事業、通信、建設など幅広い分野での協力可能性が提示されました。特に現地側からは、観光と農業、エンジニアリングを結びつけた新たな成長戦略が示され、日本の技術と人材育成支援への期待が強く寄せられました。

セミナー終了後にはレセプションが行われ、出席者間の交流がさらに深まりました。ここでジョー・パコア・ルイ外務省国際協力・対外貿易局長兼 EXPO2025コミッションナールより、環境分野の人材育成のためにバヌアツから大学院留学生を日本へ送りたいとの相談があり、APICとしても今後の協力の可能性を確認しました。

APIC太平洋環境セミナー

翌16日（火）には、第6回APIC太平洋環境セミナーが開催されました。本セミナーは、前日の経済セミナーに続けて実施されたことで、経済と環境の課題を連続して議論する新たな枠組みとなりました。司会進行はAPIC田中一成常務理事が行いました。開会にあたり、奥田大使とギブソン・デービッド事務次官（バヌアツ気候変動省）が挨拶を行い、環境課題解決に向けた国際協力の重要性を強調しました。続いて織教授（上智大学）が日本の廃棄物処理・リサイクルシステムを紹介し、環境省・吉富萌子氏が日本（環境省）による支援の取り組みを説明。GOMISOリユーシヨンス・関山一太氏はパラオヤツバルでの実践事例を報告しました。

パネルディスカッションでは、ロンテクスター・モゲロール氏（気候変動省）、吉富氏、関山氏に加え、会場からはポートビラ市当局、JICA青年海外協力隊員、日本企業関係者も議論に参加。埋立地不足と分別の課題、水汚染の問題、リサイクル市場の未整備と輸送コスト、機材維持管理や人材育成の必要性といった現実的な問題が指摘されました。一方で、リサイクル米袋を利用したバッグ製作・販売事例やエコツーリズム活動を通じた啓発といった「環境を経済機会に転換する取り組み」も共有されました。奥田大使からは「合意形成とキーパーソンの発掘の重要性」が指摘され、PIC斎藤所長からは「ごみは資源」という観点から、ビジネス連携や日本の離島との協働の可能性が示されました。会場には2023年にAPICの「太



7. 講演中の織教授 8. 会場の様子

平洋・カリブ記者招待計画」に参加したアニータ・ロバーツ・バヌアツ・デイリー・ポスト紙記者が訪れ、本セミナーを同紙で取り上げ、APICの事業の成果が現地社会に還元される意義深い場面となることを期待されます。

今回、PICとの合同開催により日本企業及びバヌアツ政府関係者を含め経済セミナー参加者も多数出席し、環境と経済の接点を広く共有することができました。現地の具体的な課題が議論されると同時に、APIC環境セミナーとして初めて日本企業との接点が提示され、経済と環境の両面から持続可能性を考える意義が共有されたことは本セミナーの大きな成果であり、また今後バヌアツにおける環境、特に廃棄物処理の分野において、ODA等の日本政府による関わりだけでなく、民間企業の参画が期待されるものとなりました。

ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援2025



(写真提供：在ジャマイカ日本国大使館)

2025年5月31日、在ジャマイカ日本国大使館と西インド諸島大学（UWI）の共催により、日本語スピーチコンテスト2025が開催されました。本コンテストはJICA、ジャマイカ日本人会、JET同窓会、ジャマイカ日本語教師会の協力のもと、国際交流基金、イーストジャパニーズ、当協会の協賛により実施されました。

当日は約70名が参加し、渥美恭弘在ジャマイカ日本大使、UWIヴィロリア現代語・文学部学部長の挨拶の後、日本語学習者6名がスピーチを発表しました。

発表はレベル1（初級）およびレベル2（初級〜中級）の2部門に分かれ、それぞれ3名ずつがスピーチを披露しました。スピーチのテーマは、レベル1が「私の好きなもの」、レベル2が「環境／観光／エネルギー」から選ばれました。スピーチは日本語のみで行われ、終了後には日本語による質疑応答も行われました。レベル2で優勝した学生は今回が3度目の出場となり、ついに優勝できたことへの喜びを語っていたそうです。

さらに、日本文化紹介の一環として、UWIジャパンクラブによる歌や在留

邦人によるダンスパフォーマンスのほか、過去のコンテスト参加者やUWI卒業生による日本語学習経験や今後の目標に関するプレゼンテーションなども行われました。

また、今回のコンテストでは、日本語が分からない方にも配慮し、英語要約がスクリーンに投影されました。来場者からは、日本語学習経験にかかわらず楽しめたという声もあつたようです。

APICは今回も、日本語の本や扇子、書道用品のほか、アニメ関連グッズや和風小物など、日本文化に親しめるさまざまな品を提供しました。参加者には大変喜ばれたとのことでした。

西インド諸島大学
University of the West Indies (UWI)

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。4つのキャンパス（ジャマイカのモノ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケープヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブアイランズ校）の他、通信制のグローバルキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

カリブ諸国・リーダー招待計画

西インド諸島大学・学長招待計画

2025年11月9日から15日まで、A P I C はジャマイカにある西インド諸島大学モナ校 (University of the West Indies (U W I) Mona Campus) のデンシル・ウイリアムズ学長を招待しました。同行したのは、医学部のマーヴィン・リード教授と工学部長のエイドリアン・ローレンス博士です。

訪問期間中、医学分野では慶應義塾大学および東京大学医学部、民間企業の株式会社アルムを、工学分野では筑波大学、産業技術総合研究所（産総研）、パナソニックを訪れました。また、連携協定を締結している上智大学では、今後の教員レベルでの交流などについて意見交換が行われました。なお、各訪問先にはA P I C の荒木事務局長・理事が同行しました。

今回のモナ校学長の招待により、2017年から開始された西インド諸島大学学長招待計画（モナ校〈ジャマイカ〉、ケープヒル校〈バルバドス〉、セント・オーガスティン校〈トリニダード・トバゴ〉）がようやく実現しました。

本部鉄道計画部長より事業概要の説明があり、その後、担当者からジャマイカを含むカリブ諸国での主な事業について紹介がありました。

また、U W I 側が首都キングストンでのL R T（ライトレールトランジット）の開発に関心を持っていることを踏まえ、日本工営が世界各国で展開している鉄道事業に関するコンサルタント業務の概要についても説明がありました。

さらに、日本工営がカリブ海で環境問題となっているサルカッサム（ホンダワラ属の褐色大



（ただし、近年設立されたファイブ・アイランズ校〈アンティグア・バーブーダ〉については、今後の検討課題となっています。U W I については、本誌16ページをご覧ください。）

A P I C でのオリエンテーション

一行は11月9日（日）に来日し、10日（月）午前中にA P I C を訪問しました。重家理事長より歓迎の挨拶があり、日本の政治・経済・社会情勢および対外的な課題について説明が行われました。続いて荒木事務局長から、訪問先を含むプログラム内容およびA P I C の対カリブ協力・支援活動の実績について説明がありました。

上智大学アイランド・サステナビリティ研究所あん・まくどなど教授との懇談

A P I C のオリエンテーション終了後、上智大学大学院地球環境学研究科教授

型藻類で、2011年以降カリブ地域等で爆発的な繁殖・漂着し、悪臭による環境汚染の他、観光業や漁業へも影響し、同地域の社会経済に打撃を与えている。）の活用支援にも取り組んでいることが紹介され、U W I 側からは今後の共同研究に向けて協力をお願いしたいとの発言がありました。

慶應義塾大学医学部訪問

11日（火）午前、慶應義塾大学医学部を訪問しました。最初に、武林医学部長・衛生学公衆衛生学教授より、大学の歴史および医学部の概要について説明があり、その後、南宮感染症学教室教授（感染制御部部长・臨床感染症センター長）より、慶應義塾大学医学部の6年間のカリキュラム構成について説明がありました。

特に、海外研修に力を入れている点が紹介され、選抜された学生は、提携先である米国、欧州、アジア太平洋地域の大学病院で、短期の臨床見学や実習に参加できることが説明されました。

続いて、最近まで米国のジョーンズ・ホプキンス大学に数か月留学していた学生2名から、留



上：慶應義塾大学にて 下：東京大学にて

であり、アイランド・サステナビリティ研究所所長のまくどなど教授と面会しました。まくどなど教授より、研究所の活動について説明があり、また、U W I ・A P I C ・上智大学の三者間の合意に基づき設立された奨学金制度の下で、U W I のケープヒル校（バルバドス）から毎年1名の大学院生を受け入れていることが紹介されました。さらに、まくどなど教授からはジャマイカからの学生も受け入れたい旨が述べられました。

株式会社アルム訪問

11月10日（月）午後、株式会社アルム (Allm Inc.) を訪問し、相良執行役員

学経験についての発表がありました。これを受けて、リード教授から交換留学の可能性について質問があり、慶應義塾大学側からは前向きに検討可能と回答され、今後、実現に向けて引き続き連絡を取り合うこととなりました。

東京大学医学部訪問

11日（火）午後、東京大学医学部を訪問しました。最初に、石原副研究科長より医学部の概要説明があり、その後、肝胆膵外科における臨床活動、泌尿器科領域の最新治療動向、リハビリテーション医学講座における教育・臨床・研究活動の概要、さらに看護学およびグローバル看護研究センターの取り組みについて、それぞれ担当教授より説明がありました。

教員レベルでの連携については、双方



ジャマイカ Jamaica

中米カリブ海地域に位置する立憲君主制国家。1962年にイギリス連邦加盟国として独立。

面積：10,990km²（岐阜県とほぼ同じ大きさ）
人口：282.7万人（2022年、世銀）
首都：キングストン
民族：アフリカ系が9割
言語：英語（公用語）、ジャマイカ・クレオール語（いわゆる「パトワ語」を含む）
宗教：キリスト教

（基礎データ出展：外務省 HP）

（グローバル事業開発部部长）より同社の事業について説明を受けました。

同社は2022年にD e N A の連結子会社となり、遠隔医療支援ソリューション「Join Mobile Clinic」を提供しています。このサービスは医療現場での情報共有を効率化するもので、医学部生の教育課題を抱えるU W I 側はこのサービスに強い関心を示し、今後、同社とU W I との間で連携に向けた協議を進めることとなりました。

日本工営株式会社訪問

10日（月）午後、日本工営株式会社を訪問しました。冒頭、望月鉄道技術

で検討可能との認識が共有され、今後の協議は国際交流室が窓口となつて進められることとなりました。

筑波大学訪問

12日（水）午前、筑波大学を訪問しました。最初に、筑波大学サンプアロオフィス副運営管理者の小金澤教授より、大学の概要について説明がありました。

同オフィスは、筑波大学が2015年にブラジル・サンパウロ大学キャンパス内に設置し、日本と中南米諸国との協力促進を図ることを目的としたグローバル戦略拠点です。筑波大学としてもカリブ地域の大学との連携を模索しており、今後、具体的な連携内容について協議を進めることとなりました。

続いて、同大学の「エンパワースタジオ」を視察しました。ここは、エンパワーメント情報学（人の機能の補完・協調・拡張によつて生活の質を向上させることを目指す情報学）の実験施設で、広大な実験空間と前面のギャラリースペースから構成されています。視察時には、施設内の壁面全体に遠隔地で撮影した建物内部や町並みが投影され、見学者の動きに合わせて映像が変化する仕組みが紹介されました。

青森市出身。1981年に外務省入省後、在イラク日本国大使館、在ホノルル日本国総領事館、在ガーナ日本国大使館、外務省本省各局で勤務。その後、総合外交政策局総務課 外交政策調整官、経済局漁業室長等を経て、2018～2021年に在ブリスベン日本国総領事、2021～2024年に駐マーシャル諸島共和国特命全権大使を務め、2025年よりAPIC 常務理事。

2025年3月31日付でAPICの常務理事に選任された田中一成氏（前駐マーシャル諸島共和国大使）にインタビューを行いました。これまでの赴任地での経験や、現在の立場から見たAPICの役割等についてお話を伺いました。【聞き手：APIC職員 加藤】



田中 一成 APIC 常務理事
(前駐マーシャル諸島共和国大使)

パナソニックホールディングス(株) ショールーム視察

その後訪れたサイバニクス研究センターでは、人間の身体機能を拡張・補助する目的で開発されたロボットスーツH A L (Hybrid Assistive Limb) の着用デモンストレーションが行われ、学長一行は最先端技術に非常に高い関心を示していました。

国立研究開発法人 産業技術総合研究所（産総研、AIST）

12日（水）午後、産総研を訪問しました。経済産業省所管の産総研は、経済および社会の発展に資する科学技術の研究開発を総合的に進める、日本最大級の公的研究機関です。冒頭、企画本部国際部国際室総括主幹のカザウィ・サイ博士より研究所の概要説明があり、研究所のミッション、規模、研究者数などの概要説明を受けました。

続いて、「物を触らずに調べる」技術であるリモートセンシングについて説明を受けた後、常設展示施設「AIST-Cube」を見学しました。最先端の国立研究所の取り組みに一行は深い関心を寄せていました。



13日（木）午後、パナソニックのショールームを訪問しました。創業の歴史やブランドが変遷していく過程、そして高度経済成長期に普及したテレビ・冷蔵庫・洗濯機などの代表的な製品について、数多くの展示を見学しながら説明を受けました。

その後、同社が単なる家電メーカーにとどまらず、社会貢献型のサステナビリティを追求する企業へと進化していることについてプレゼンテーションが行われました。続いて、自動搬送ロボット「ハコボ」のデモンストレーションも披露されました。



学長一行は、パナソニックのビジョンとミッションに強い感銘を受け、その日の理事長主催の夕食会でも話題に上りました。

上智大学 杉村美紀学長との会談

13日（木）午後、上智大学の杉村学長と会談しました。ウイリアムズ学長

からは、安倍首相（当時）のジャマイカ訪問時に上智大学とUWIとの連携協定が締結されて以来、APICの招待によりケープヒル校やセント・オーガスティン校の学長が訪日してきたこと、そして今回、自身がモナ校の学長として訪日する機会を得られたことに

対し深い謝意が示されました。また、UWIの学生が毎年、学生招待計画を通じて上智大学のプログラムに参加していることにも感謝が述べられました。

これに対し杉村学長からは、UWIとの連携協定が早下学長（当時）によって締結された当時、自身は副学長としてその経緯をよく覚えていると述べられました。また、その後APICの支援により、UWIとの関係がここまで発展してきたことに対し、大きな感謝が示されました。

その後の意見交換では、この連携協定に基づき、今後は教員レベルの交流を進めていく方向で両者の考えが一致しました。

理事長主催夕食会

13日（木）夜、ウイリアムズ学長一行の歓迎夕食会が如水会館にて開催されました。重家理事長の挨拶と乾杯の音

く議会制民主主義とダイナミックな政権交代を目にしました。また、米国でありかつ太平洋島嶼地域であるホノルルの総領事館にも計約7年勤務し、100年以上前にハワイで開始された日系移民の苦勞と特に真珠湾攻撃を契機とした苦悩の歴史や、それを乗り越えて全米で活躍し、また日本の伝統や習慣を大切にしている日系人の方々の姿を見ることができたのも、大きな経験であり、学びでした。

さらに、イラン・イラク戦争当時にイラク・バグダッドの大使館に勤務し、その後の湾岸戦争も含め、戦争が現実として存在する地域での外交を経験しました。かつて生活していた都市が攻撃される様子を映像で目にしたが関連する業務にあたる中で、アラブ・イスラムとの文明観や価値観の違い、そして日本が関わる中での国際社会の厳しさを強く意識するようになりました。

また、西アフリカ・ガーナでの在勤は、将来性を含めたアフリカを、そして開発協力の重要性を知り、日本がアフリカですべきことと出来ることを考える貴重な経験となりました。

◆駐マーシャル諸島共和国大使としての任期を振り返って

駐マーシャル諸島大使として、細長い環礁という閉ざされた環境で、また、熱帯での生活は決して楽ではありませんでしたが、日本との歴史的なつながりとマーシャル諸島の

頭で和やかに始まり、夕食会は終始和やかな雰囲気で見られました。最後にウイリアムズ学長より、今回の訪日招待に対する謝意と訪問が実り多いものであったとのスピーチがありました。

閉会にあたり、駐日大使としてのAPICのイベントへの出席が今回で最後となるリチャーズ駐日ジャマイカ大使から、これまでのAPICの支援に対する感謝の言葉が述べられました。

京都観光

14日（金）、学長一行は新幹線で東京駅を出発し、京都を日帰りで訪れました。高台寺をはじめ、八坂の塔や祇園の町並みを車窓から眺めつつ、北野天満宮、紅葉苑、三十三間堂、金閣寺を巡り、秋の古都の風情を存分に堪能されました。昼食には焼き鳥を味わい、帰りの新幹線ではビールを飲みながらゆっくりと過ごされたとのことでした。



人々の温かさからどこか安心感もあり、大使館員として同行した家内の支えもあり、仕事は進めやすかったと感じています。新型コロナウイルス禍で制限された人の往来や業務も状況の改善とともに再開され、在任中に引き渡しを迎えた経済協力案件もありましたが、資材価格や輸送費の高騰等により在任中に予定通り完成できなかった案件もあり、成果と課題の両面を実感した任期でした。

◆若い世代へのメッセージ

44年間の外交官人生を通じて強く感じているのは、どのような経験も決して無駄にはならないということです。当初は望んでいなかった配置や業務であっても、後になって必ず何らかの形で役に立ちます。短期的な成果にとらわれすぎず、少し長い視点で経験を積み重ねて頂ければと思います。



太平洋に浮かぶ29の環礁と5つの島が連なる島国。1986年に米国から独立。

面積：約180km²（霞ヶ浦とほぼ同じ大きさ）
人口：38,827人（2023年、世界銀行）
首都：マジュロ
民族：ミクロネシア系
言語：マーシャル語、英語
宗教：キリスト教

（基礎データ出展：外務省HP）

第3期 APIC-UWI 留学生

皆さん、こんにちは。バルバドス出身のショネル・グリフィス、22歳です。現在、上智大学大学院地球環境学研究科で修士課程に在籍しています。趣味はバレーボール、水泳、そしてドミノ遊びをすることです。

上智大学の大学院に進学することを選んだのは、海外に渡って異なる文化を体験し、世界中から集まる人々と出会う貴重な機会になると思ったからです。ここ日本で得た知識を、バルバドスやカリブ地域全体の環境政策の発展・改善に可能な限り活かしたいと考えています。また、上智大学で新しい友人を作り、将来的に役立つようなネットワークを築けたらと思っています。

日本滞在中は、おいしい食べ物をたくさん味わい、都市だけでなく田舎や山など、さまざまな場所で日本文化を体験したいです。そして、ディズニーランドにはとても、とても行ってみたいです。

日本の文化はバルバドスのものとは大きく異なっており、今のところ一番衝撃を受けたのは、人々がとても静かなことです。ですが、私はそれをとても心地よく感じています。もう一つのカルチャーショックは、人々がとても急いで移動することです。母国ではみんなゆったりとしたスピードで行動しています。日本で直面する最大の課題は、家族と遠く離れて暮らすことだと思います。これほど遠く離れて生活するのは初めてです。また、日本語が話せないため、言葉の壁も大きな挑戦になるでしょう。しかし、これから学んでいきたいと思っています。



ショネル・グリフィス さん
Ms. Shonnelle Griffith

バルバドス出身

APIC では太平洋・カリブ地域の留学生を支援するため、現在3つの奨学金制度を設けております。

APIC-UWI 留学生

カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することを目的として、APIC-MCT留学制度と同様に、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号の取得を支援するプログラムです。西インド諸島大学（The University of the West Indies：UWI）・上智大学・APICの三者間の協定が締結され、2023年度より開始しました。これまでに1名の学生が本制度によって卒業しました。

APIC-MCT 留学生

上智大学・ミクロネシア自然保護基金（Micronesia Conservation Trust：MCT）・APICの三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究科での修士号取得を支援するプログラムです。2017年のプログラム開始以降、これまでに10名が卒業しました。

ザビエル留学生

2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。本奨学金制度により、これまでに7名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

学生への支援をより一層充実させるため、本奨学金制度へのご寄付をお願いしております。いただいた寄付金は、留学生の受け入れにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等に活用させていただいております。

皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

● ザビエル高校（Xavier High School）とは

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

対 象	ザビエル高校卒業生（毎年1～2名入学）
留学先	上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)
奨学金	卒業までの4年間の奨学金を授与
振込先	三菱 UFJ 銀行 本店（店番 001） 普通口座 1660339 口座名：一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口 カナ名：ザイ）コクサイ キョウリヨク スイシン キョウカイ ※振込手数料はご負担をお願いしております。

第10期ザビエル留学生と第3期 APIC-UWI 留学生が
上智大学／大学院に入学



2025年9月22日、第10期ザビエル留学生としてクレイトン・エゼキアスさんとリュウ・ナカソネさんが上智大学に入学しました。また、第3期 UWI 留学生としてショネル・グリフィスさんが上智大学大学院に入学しました。

クレイトンさんとリュウさんは理工学部に入學し、今後4年間、日本で学生生活を送ります。ショネルさんは地球環境学研究科で2年間の研究に取り組む予定です。

新入生3名からのメッセージをご紹介します。（APICによる仮訳）

こんにちは！私はクレイトン・サム・エゼキアスと申します。ミクロネシア連邦チューク州の出身です。現在、上智大学理工学部のグリーンサイエンスコースの1年生として学んでいます。

私は、日本の生活に深く身を投じ、探求することを目的に、名高き格式ある上智大学を選びました。また、上智大学で得られる学びは、今後の人生において必ず役立つと信じています。特に、「他者のために、他者とともに（For Others, With Others）」という大学の理念に共感しています。これは、持続可能な未来のために協力し合うことの大切さを強調するものです。

私はこれまで一度もチュークを離れたことがありませんでした。ですから、日本の上智大学に進学する機会を得たとき、ここに来るという選択に少しの迷いもありませんでした。日本に到着した瞬間、見渡す限り広がる街並みに圧倒され、胸が高鳴りました。しかし、最もカルチャーショックを受けたのは、どこへ行っても周りにたくさんの人がいることでした。私はもともと狭い場所があまり得意ではないので、最初に寮へ行くとときに乗った電車が少し大変でしたが、次第に慣れて、今では気にならなくなりました。むしろ、毎日の通学時間が心を落ち着かせたり、元気を与えてくれたりする時間になっています。また、キャンパスの明るく活気ある雰囲気は、学業への意欲を高めてくれます。滞在中は、日本各地を訪れてその自然の美しさを堪能し、豊かな文化や歴史についてもっと学びたいと思っています。少しでも日本語を覚えられたら嬉しいです。上智大学での学びを続けながら、日本の多様で活気ある環境の中で自分自身をさらに成長させていきたいと考えています。



クレイトン・エゼキアス さん
Mr. Kreiton Ezekias

ミクロネシア連邦出身



リュウ・ナカソネ さん
Mr. Ryu Nakasone

ミクロネシア連邦出身

皆さん、こんにちは！私はリュウ・ナカソネと申します。ミクロネシア連邦のボンベイ出身です。現在、上智大学理工学部のグリーンエンジニアリングコースで学んでいます。

上智大学で学びを深めたいと思った理由のひとつは、APICの奨学金による全面的な経済支援があったからです。このような形で東京・日本で学ぶ機会をいただけたことに、心から感謝しています。また、学生としてだけでなく、一人の人間として成長するための最良の道だと感じ、上智大学で学びたいと思いました。家族とこんなにも離れて暮らすことは確かに大きな挑戦ですが、世界中から集まった、さまざまな背景をもつ学生たちと出会い、文化を分かち合うことは、自分にとって学びと成長の貴重な機会となっています。

日本での生活は、これまでのところ本当に驚くことばかりです。電車の中では大きな声で話さないことや、大きく異なる食文化など、小さなカルチャーショックはありましたが、それ以上に良い面がたくさんあります。

なかでも一番驚いたのは、日本の人々の親切さとおもてなしの心です。テーブルに水筒を置き忘れてしまったときも、誰も持って行かなかったのには本当に驚きました。日本の人々は本当に思いやりにあふれていて、これからの生活の中でもその優しさにもっと触れられたらと思います。

そして、グリーンエンジニアリングの学業でも成功を収めたいと考えています。試験やテストなど、避けられない大変さもあると思いますが、APICと上智大学からいただいたこのご厚意に応えるためにも、与えられた機会を最大限に活かしていきたいです。

バルバドス 歴史の散歩道

その7 第5部 砂糖、ラム酒、そして奴隷

寄稿：元 駐バルバドス日本国大使 品田 光彦

APIC ウェブサイトでは、品田光彦 元駐バルバドス日本国大使寄稿の連続コラム「バルバドス 歴史の散歩道」を配信しております。本誌では「バルバドス 歴史の散歩道（その7）」の内容を掲載しています（2021年執筆）。その他のコラムについては、APIC ウェブサイトをご覧ください。

（本稿には現代の基準に照らすと差別的、不適切な表現が含まれていますが、いずれも過去の史料・文献の翻訳部分です。これらの箇所は筆者自身の見解ではなく、当時の社会状況をj知るためには正確に訳すことが必要と考えたからであることをご理解下さい。）

筆者がバルバドスに住むようになってから好きになったもののひとつにラム酒があります。

でも、世界中のアルコール飲料が手に入る日本で、残念なことになぜかラム酒はそれほどポピュラーではないようです。それどころか、日本でラム酒の話をすると「ああ、お菓子作りなんかを使う、あの甘いお酒ね」などという怪しからぬ反応が返ってくることも多い。あなたがストレートで飲んだラム酒がもし甘かったとしたら、それは「まがいもの」です。

バルバドスをはじめとするカリブ諸国で作られ世界中に輸出されている「本場もの」のラム酒は、砂糖キビから砂糖を精製する過程でできる糖蜜（モラセス）を発酵・蒸留・熟成して作られる、かなりアルコール度数



現存世界最古のラム酒蒸溜所で作られ続けているバルバドス産のラム酒

手本（？））となり、他のイギリス植民地もこれに倣うようになって、ジャマイカ、アンティグア、サウスカロライナなどでも似たような法律が作られていきました。

奴隷制と今

奴隷制は世界の多くの地域にさまざまな形で存在していました。日本とて例外ではなく、能の「隅田川」や森陽外の「山椒大夫」を見れば日本にも奴隷制や人身売買があったことが分かります。

けれども、こんにち「奴隷」という単語を聞くと、多くの人は、アフリカの黒人が大西洋を越えて南北アメリカ大陸やカリブ・西インド諸島の植民地に運ばれた「大西洋奴隷貿易」によって奴隷化された人々のことを思い浮かべることが多いのではないのでしょうか。それは、この貿易がかつていくつかのヨーロッパ諸国による大規模かつ組織的な国家事業として行われていたことと関係しています。当時植民地だったこれらの地域では現在、奴隷だった人々の末裔が大勢暮らしていて、いまだに人種差別をはじめとするさまざまな問題が根強く残っており、時としてなにかのきっかけで社会・国全体を大きく揺るがすことがあるからです。

この点、今日のバルバドスでは黒人人口が圧倒的多数を占めており、むかし支配層であった白人たちは小さいコミュニティに固まってむしろ遠慮がちに暮らしている

の高い飲み物です（註1）。ただし、砂糖キビから作られると言っても決して甘くはありません。上質のブランドーを思わせるような芳醇な味と香りで、ストレートでもよし、オンザロックや水割りにしてもよし。モヒートやダイキリといったカクテルにも欠かせません。また、フルーツベースのよく冷えたラムパンチはカリブの暑さをしのぎながらホロ酔い気分になるには最適な飲み物かもしれません（ただし口当たりのよいラムパンチを調子に乗って飲み過ぎると、必ずあとで反省することになります）。

ラム酒が作られるようになったのは、カリブの一部の島々で砂糖キビの栽培がはじまった16世紀後半ごろだと考えられています。「ラム酒作り発祥の地はバルバドスである」という人もいますが、ほかにもいろいろな説があるので確かなことは分かりません。ただはつきりしているのは、現在世界各地で作られているラム酒の中で、「マウント・ゲイ」というバルバドスの銘柄が18世紀初頭から操業を続ける現存世界最古のラム酒蒸溜所で作られ続けているということです。

バルバドスに5年半暮らした筆者は、その間ラム酒にたいそうお世話になりました。2022年4月、筆者がバルバドスでの任期を終えて日本に帰る数日前に、ミア・モトリー首相が「あなたがこれ好きなの知ってるわよ」と言っ、わざわざ筆者の家まで届けさせてくれたお土産も「マウント・ゲイ」のラム酒

ので、黒人に対する人種差別などが問題になることはほとんどありません。けれども、どの国でも過去の歴史がその国の今に投影されているのと同様に、奴隷制の存在というバルバドスの過去が、現在のこの国の在り方や人々の行動様式に影響を残していることは否定できません。

大西洋奴隷貿易の実態

大西洋奴隷貿易は16世紀にポルトガル人、続いてスペイン人によって本格化されました。彼らは安価なヨーロッパ産品をアフリカ西岸地域に輸出し、そこで黒人奴隷を手に入れました（註2）。この人々を西インド諸島、南北アメリカ大陸の植民地に「輸出」し、そこで交換した鉱物や農産物をヨーロッパに持って帰るということを始めたのです。

黒人奴隷は植民地の鉱山やプランテーションでの労働力として使役されました。その背景としては、当初ポルトガル、スペインの植民地で働かされていた先住民（ネイティブ・アメリカン）が労働現場での酷使、劣悪な環境や、ヨーロッパから持ち込まれたインフルエンザ、天然痘といった伝染病で激減し、労働力が不足するようになったことが挙げられます。

17世紀に入ってポルトガル、スペインが大西洋の制海権を失い失っていくと、新興のイギリス、フランス、オランダ、さらにデンマークやスウェーデンといった国



上質なラム酒はオークなどで作られた樽で長期間熟成されます。ーバルバドスの「セントニコラス・アビー・ラム酒工房」で撮影

だったのです。こんなふうにはカリブでの余暇や社交に欠くことのできないアイテムになっているラム酒ですが、このお酒には悲しい過去があります。

昔、砂糖キビプランテーションの主な労働力が黒人奴隷だった頃、ラム酒は奴隷たちの血と汗と涙の結晶だったのです。

人を所有するという発想

「ニグロや奴隷がキリスト教徒に狼藉をおこなった場合、巡査によるムチ打ちの刑に処せられる。ふたたび罪を犯した場合にはムチ打ちに加え、鼻を削がれ焼きゴテで顔に焼印を押される。彼らは下劣な奴隷であるので、その状態にふさわしく、イング

でが奴隷貿易に手を染めるようになります。大西洋奴隷貿易は19世紀まで、300年以上にわたって続けられました。この間に一体どれくらいの人々がアフリカから連れて来られたのでしょうか。もちろん正確な数字が残っているはずもなく、後世のいろいろな調査でも数百万人から数千万人と大きな幅があつて、正直なところはつきりとは分かりません。

筆者の手に「カリビアン・スクール・アトラス」という地図帳があります。バルバドスなど英語圏カリブの国々の義務教育課程で使われている教材です。その中には、西暦1500年から1870年までの間、アフリカ西海岸から北米に100万、中米に100万、南米に350万、そしてカリブには450万の黒人が奴隷として運ばれたという記載があります。合計1000万人ですが、いろいろな資料を比べてみると、筆者には大体そのくらいが当たらずとも遠からずの数字なのではないかと思われま

す（註3）。とは言え、いずれにしてもどの数字も額面通りには受け取れません。当時の帆船で大西洋を渡するためには少なくとも2〜3ヶ月はかかっていました。この間、船底にすし詰めにした人々のうち、かなりの割合（二説では2〜3割）が劣悪な環境の下、病

「バルバドス奴隷法」は、世界各地のイギリス植民地のなかで白人支配層が黒人奴隷の処遇について成文化した初めての法律でした。そのため「グッド・ガバナンスのお

もずっと多かったはずだ。

これほどの数の「売買」の対象となった人の多くが若くて健康な人たちだったであろうことを考えれば、供給地となったアフリカの社会、経済は数百年間にわたり壊滅的な被害を受けたと言えます。そして、その荒廃は以降のアフリカの発展にも深刻な影響を及ぼしました。

このように考えると、大西洋奴隷貿易は、「キリスト教の博愛主義」を標榜する欧米の白人文明が歴史上、他の人種・民族に対して行った非人道的行為のうちでも最悪のものの一つだったと言えるでしょう。

バルバドス奴隷制のはじまり

バルバドスにアフリカ黑人奴隷が組織的に連れてこられるようになったのは17世紀半ばからです。

イギリスによるバルバドスの植民地化当初には、白人の年季奉公人が主要な労働力であったことは前に述べました。そのころのバルバドスの最大の収入源はタバコ葉でした。イギリスから来た入植者たちは、はじめのうちは比較的小規模な農園で、年季奉公人を使って栽培したタバコをヨーロッパに輸出していたのです。

ところが、ほどなくして島のタバコ産業は苦境に立たされます。北米のイギリス植民地・バージニアでできるタバコとの競争に負けたためです。バージニア・タバコはバ

ルバドス産のそれよりも質が良く、これに目をつけたイギリス本国がバージニア・タバコの関税を非常に低く設定したため、バルバドスのタバコ輸出は立ち行かなくなってしまったのです。

この時バルバドスに手を差し伸べたのはオランダでした。海洋国家として台頭していたオランダの商人は、塩漬け保存食や衣類などの安価な生活物資を供給したり、タバコ農園の経営者に低利の金貸しを行っていました。

オランダ人はバルバドスのタバコ産業が苦境にあると見ると、当時すでにブラジルで盛んになっていた砂糖キビの栽培をバルバドスに紹介しました。1624年にブラジル東部のバイーアをポルトガルから奪取したオランダは、1630年にレシフェを中心にオランダ領ブラジルを建てます。そして、ここの砂糖キビ栽培のためにアフリカ人奴隷を連れてくるようになっていたのです。イギリスやフランスが本格的にカリブ進出を始めたのはちょうどこの頃のことですから、オランダは商売の上でイギリス、フランスの一步先を行っていたわけです。1637年にブラジルから最初に砂糖キビをバルバドスに持ち込んだのはピーター・プロウアーというオランダ人だったといわれています。オランダ人は商売上手で、バルバドスのタバコ農園主たちをブラジルまで連れて行き、砂糖キビ・プランテーションの「見学ツアー」みたいなことまでやっています。

今のような洗練された製法がなかった当時のラム酒は荒削りで安価な飲み物で、重労働でフラフラになった奴隷に飲ませる気付け薬の役割も果たしていました。

カリブの砂糖キビ・プランテーションにおける奴隷労働は北米の綿花プランテーションでのそれよりもずっと苛酷であったと考えられています。後世、カール・マルクスは「奴隷制がなければ綿花はない。綿花がなければ近代工業はない。奴隷制は植民地に価値を与え、植民地は世界貿易を作り出し、世界貿易は機械的大工業の必須条件である」^(註6)と喝破し、奴隷制がイギリス産業革命の大きな要因のひとつだったことを指摘しました。しかし、さすがのマルクスも北米の綿花プランテーションには目を向けていたものの、カリブの砂糖キビ・プランテーションにまでは気が回らなかったようです。

プランテーションはブラック企業

「バルバドス奴隷法」を見れば分かるように、「奴隷の人権」などという発想はなかったので、休暇や労働の合理化、衛生環境の整備といった「福利厚生」が顧みられることはまったくありませんでした。若い奴隷の死亡率が高く、奴隷たちが総じて短命だったことは容易に想像できます。けれども、砂糖キビ・プランテーション領主にとって

バルバドスの気候と土壌は砂糖キビ栽培に適していました。はじめのうちは砂糖キビ自体を食用にし、茎を圧縮してできる糖蜜からラム酒だけを作っていたのですが、1640年代からは輸出品としての砂糖作りがはじまります。

そのころ、ヨーロッパでは、中国、日本から伝わった茶や、西アジアから伝わったコーヒーを飲むことが流行するようになっていました。お茶やコーヒーを飲む時には砂糖を入れたくなる。ケーキも食べなくなる。ヨーロッパにおける喫茶の習慣や、やたらと甘ったるいお菓子の文化はカリブからの砂糖の豊富な供給がなければ生まれていなかったでしょう。

バルバドスの製糖業は短期間で軌道に乗り、砂糖とラム酒の輸出でどんどん儲かるようになります。プランテーションを拡大するために土地の囲い込みが始まり、地価は数十倍にも高騰しました。プランテーション領主は濡れ手に泡、と言いたいところですが、解決しなければならぬ大きな問題がありました。労働力不足です。

それまでは白人年季奉公人が主な働き手だったのですが、これではとても足りない。だいいち、彼らは年季があげれば自由の身になってしまいうので永続的にこき使うことはできませんでした。白人年季奉公人の労働に支えられた大規模農業経営はサステイナブル(持続可能)なやり方ではなかったのです。バルバドスに新しいプロジェクトを持ち

数が足りなくなったら新しい奴隷をアフリカから買ってきたほうが安上がりでした。

18世紀を通じて、年平均にならずと毎年3千人ほどの奴隷がバルバドスに「輸入」されていました。そして、奴隷に子供が生まれれば、ただで新たな「商品」が再生産されることになり、親から引き離されて売買の対象となりました。プランテーションは、まさに究極のブラック企業だったのです^(註7)。

砂糖とラム酒の輸出による経済的繁栄はバルバドスの栄光の時代であったのと同時に、非人道的な奴隷制というダークサイド・ヒストリーという面ももっていました。本稿でこれまで紹介してきたウィロビー男

かけたのは、またしてもオランダ人でした。「人手が足りんのやったら黑人奴隷を使えばええんとちゃいまっか？ 安くしときませ」と、オランダ語訛りの英語で囁いたのかどうかは分かりませんが、オランダは落ち目のポルトガルから西アフリカの奴隷積み出し拠点を引き継いでいたため、奴隷を売りさばく得意先を捜していたのです。

バルバドスのプランテーション領主たちは、この話に飛びつきました。バルバドスに残されている史料によると、1645年には6千人に満たなかった黒人人口は1684年には6万人となり、白人人口の3倍を数えるまでになったということです。一方、白人年季奉公人の数は減っていき、1684年にはわずか2千人ほどになりました^(註4)。

バルバドスで奴隷制が定着した背景には、タバコから砂糖へ、つまり中世的、牧歌的な小農経営から近代の初期資本主義的な大規模プランテーション経営への移行という産業構造の変化があったのです。

砂糖とラム酒の作り方

砂糖キビ・プランテーションで働かされていた黑人奴隷たちの日常はどんなものだったのでしょうか？

奴隷たちの間にもいろいろと職能の分化があったのですが、なかでもいちばん厳しかった「現場」の1日を見てみることにしましょう。

爵、エイスキュー提督などバルバドス植民地黎明期の颯爽としたブレイヤールたち、パソロミュー・ロバーツ、黒ひげなどの海賊たち、さらには宗主国イギリスの歴代国王やクロムウェルといった歴史上の有名な人々、皆、奴隷制によってもたらされる富の受益者でした。

(第5部 「砂糖、ラム酒、そして奴隷」は次回に続きます。)

(本稿は筆者の個人的な見解をまとめたものであり、筆者が属する組織の見解を示すものではありません。)

● **註1** 多くのラム酒のアルコール度数は40～50度。ラム酒には、樽で熟成させてできる褐色のゴールド・ラム酒、活性炭などに通し濾過してできるホワイト・ラム酒などの種類があります。高品質のもの多くはゴールドです。

● **註2** 大西洋奴隷貿易による奴隷の供給地だったのは、主に現在のギニア、ガーナ、コートジボアール、ナイジェリア、カメルーン、シエラレオネといった国々がある地域でした。こんにちのバルバドス国民のうち多くはガーナ付近にルーツを持つと考えられています。

● **註3** 面積的に小さいカリブに連行された黒人の数が多いのは、カリブでは奴隷の死亡率がとりわけ高く、頻繁に「代替補給」する必要があったことに加えて、バルバドスをはじめとするカリブの島々が北米など他の地域への奴隷移送の経由地だったからだと考えられます。

● **註4** 白人年季奉公人の制度は19世紀にはなくなりました。しかしその後、数世代を経ても白人コミュニティ内での社会階層を上っていくことができなかった一部の年季奉公人の子孫がバルバドスには残っていて、現在も島内のある地域に400人ほどが集住しています。この人々は「ブア・ホワイト」とか「(彼らの白い足の肌は日にやけると赤っぽくなるため) レッド・レッグス」と呼ばれて差別と偏見の対象になっています。社会から取り残された彼らの貧困、失業、非就学に加え、閉ざされた集団内での近親婚の繰り返しによる障がいなどは解決の難しい問題になっており、現代バルバドス社会の暗部となっています。この人たちの多くが、かつての 아일랜드 系年季奉公人の末裔であるため、近年アイルランド政府が救済に乗り出したのですが、あまりうまくいっていないようです。

● **註5** 砂糖キビの茎の圧搾には、のちにオランダから風車の技術が導入されるようになります。今でもバルバドス島内のあちこちに石造りの大きな風車塔の跡が残っているのはこのためです。

● **註6** マルクスがロシア人の友人、バベル・アンネンコフに宛てた1846年12月28日付け書簡の中の言及。

● **註7** 1970年代、バルバドス南部のクライスト・チャーチ教区にある旧プランテーションの敷地で、奴隷墓地の発掘が行われました。ここは1660年代にサミュエル・ニュートンという入植者が開いたプランテーションの中の奴隷集落の一角で、数世代にわたる老若男女約600人が埋葬されており、彼らの日用品や食器なども一緒に見つかっています。「ニュートン奴隷墓地」とよばれるこの場所は、西半球で保存されている最大の奴隷集団埋葬地のひとつです。



「モーガン・ルイス風車塔跡」。バルバドス島内で唯一、羽根軸が残る風車塔です



毎月1回（8月以外）開催される**APIC 早朝国際情勢講演会**では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、2021年5月からはオンラインでの配信も開始しました。現在は会場・オンライン同時配信で開催しております。

本講演のご案内は、APIC維持会員の皆様にお送りしております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しておりますAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

講師・演題一覧（2025年7月～12月実施分）

【第419回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年7月17日（木）
講師：外務審議官（経済） 赤堀 毅 氏
演題：「G7サミットと日本の経済外交」

【第420回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年9月18日（木）
講師：外務省国際法局長 中村 和彦 氏
演題：「国際社会の転換期における法の支配と日本」

【第421回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年10月16日（木）
講師：外務省アジア大洋州局長 金井 正彰 氏
演題：「最近のアジア情勢と日本の外交：中国、韓国、北朝鮮」

【第422回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年11月20日（木）
講師：外務省軍縮不拡散・科学部長 中村 仁威 氏
演題：「分断を超えるルールメイキング ～AI、宇宙、核軍縮～」

【第423回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年12月18日（木）
講師：外務省アフリカ部長 今福 孝男 氏
演題：「TICAD9の成果と今後の日本外交」

令和6年度（2024年度）

（令和6年7月1日～
令和7年6月30日まで）

事業報告書

【簡略版】

※本誌では簡略版を掲載しています。詳細につきましてはAPICホームページをご覧ください。

1. 太平洋島嶼国開発協力事業

（1）太平洋諸国・大学生招待計画【継続】

毎年7月^{（注）}に太平洋諸国から日本や東アジアに関心を有する数名の大学生を招待し、東アジア研究に関する上智大学の短期プログラム Summer Session in Japanese Studiesに参加させるとともにAPIC独自の事業として週末に日本文化や観光を体験する機会を与えてきた。

本年度は太平洋からは、5名（フィジー、ソロモン諸島、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島）の学生を招待した。APICが提供する週末のプログラムとして、6月28日は都内観光を行い、オーブントップバスツアー、江戸切子体験、浅草を訪問、7月6日は横浜で、日本郵船氷川丸、横浜中華街、カップヌードルミュージアム、コスモワールドなどを訪問、13日は株式会社エヌアイデイの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れ、千葉県立佐原高等学校の生徒たちと昼食を共にした後、一緒に香取神宮を参拝して交流を行った。その後、「佐原の大祭夏祭り」（関東三大山車祭りの1つと称され、約300年の伝統が

あり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定）に参加し日本文化に触れる機会を提供した。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたという高い評価を得ている。

（注）2020年までは1月（January Session）に参加したが、COVID-19の影響で中断し、2023年からは7月のSummer Sessionに再開。

（2）太平洋諸国・記者招待計画【継続】

毎年10月頃に公財（フォーリン・プレスセンター）の協力を得て実施しているもので、太平洋とカリブの有力若手有望記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー分野の取り組みについて理解を深めてもらい、我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行ってもらおうとするものである。プログラム・コーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏とドーン・マタス氏の2名にも本計画に参画してもらうと共に、本年度は、太平洋からは記者4名（フィジー、マーシャル、サモア、バヌアツ）を招待した。

内容としては、都内においては、外務省でアジア大洋州局大洋州課と中南米局カリブ室から記者の出身国と日本との関係等について、東京都で東京スーパードエコタウン事業について、高俊興業株式会社で産業廃

棄物のリサイクル状況についてそれぞれ説明を受け、朝日新聞東京本社では各国のメディアの状況や国際情勢等についてジャーナリスト同士の率直な意見交換を行った。

地方視察では、元外交官で鳥取県前米子市長の野坂康夫氏との昼食会にて地方自治の状況について、島根県庁では中山間地域対策、観光振興、宍道湖におけるしじみ資源の管理等について、山陰中央新報社では同社の活動内容などの説明を受けた。島根県立宍道湖自然館ゴビウスや足立美術館も視察。また、島根県隠岐諸島の海士町では、大江和彦町長を表敬し、人口減少と財政危機に直面してからの取り組みについて説明を受け、移住者によるナマコ加工工場や地元の伝統的技法も取り入れた米国人によるボート製作の現場、公立の学習塾である隠岐国学習センターの取り組み等について視察した。

プログラム修了式と重家理事長主催夕食会が開催され、各記者は取材の成果を報告。参加者全員から、今回の訪問は有意義であったとの感想が述べられた。

なお、10年前のAPIC記者招待計画の開始以来、同計画の準備と実施に関わってきたプログラム・コーディネーターのフロイド・タケウチ氏は本年度限りでコーディネーター業務から引退することとなり、重家理事長から同氏に感謝の記念品を贈呈した。2025年度からは、2018年からタケウチ氏を補佐し協働してきたドーン・マタス氏がプログラム・コーディネーターを務める。

（3）太平洋諸国・リーダー招待計画【継続】
コロナ禍で中断していたが、本年度から再開し、以下の1グループ3名を招待した。

○パラオ女性大酋長一行

2024年が、パラオの独立30周年及び日本・パラオ国交樹立30周年にあたることから、8月28日から9月2日の日程で、パラオからビルン・グロリア・ギボン・サリー大酋長（注：パラオの16州には、男女の伝統的指導者である酋長があり、ビルンはコロール州の女性伝統的指導者で最も高位の男女の大酋長のひとり）、バージニア・ナンシー・ウォン（州都のマルキョク州の伝統的指導者）、及びタギー・ウロイン・ゲルドコウ・サリー（ビルン・サリー大酋長の娘であり、次期後継者）の3名の女性伝統的指導者を招待した。大酋長は、パラオにおける野菜作り振興に関心があり、農業分野の視察の要望があったことから、埼玉県深谷市の「ヤサイな仲間たちファーム」にて農場、マルシェ、レストラン、埼玉県上里町の須賀農場にて、自然農法についての視察、関東農政局（埼玉県さいたま市）の訪問などを実施した。都内では、JICA本部にて、パラオに対する支援についてブリーフィングを受け、父親の故土屋義彦元参議院議長・埼玉県知事の代から戦没者遺骨収集等で関わりがあるということで、土屋品子復興大臣（当時）に面会した。

（4）太平洋諸国・環境セミナー【延期】
2015年7月に上智大学と共催で「太

平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦ポンペイ州、サモア、ミクロネシア連邦チューク州と、太平洋地域で合計5回セミナーを開催してきている。

本年度はバヌアツでの開催を検討していたが地震等の影響もあり、翌年度へ延期となった。

（5）APIC・MCT協力事業（離島の貯水タンク設置）【延期】

今年度は、ミクロネシア自然保護基金（Micronesia Conservation Trust：以下MCT）にて支援要請があるか打診したが、具体的な要請がなかったため実施しなかった。

（6）APICとMCTとの協力事業（大学院生支援）【継続】

本事業は、APICとMCTとの連携協定に基づき、MCTの推薦により毎年ミクロネシア3カ国から留学生1～2名を受入れ、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号を取得させるプログラム。長期的観点から環境関連に携わる人材の育成支援を目的としており、2017年のプログラム開始以降、既に10名が卒業、昨年9月に2名が入学し（現在在校生は2名）、それぞれ母国の環境に関連する研究を行っている。

（7）上智大学 アイランド・サステナビリティ研究所(Island Sustainability Institute)の支援【延期】

2022年7月、上智大学は、島嶼部や

島嶼国が良質な発展を遂げられるスキームの創成を目指し国内外を対象としたシンクタンク機能を有するアイランド・サステナビリティ研究所を設立した。APICは上智大学と連携協定を締結しており、要請があった際の具体的な支援として、シンポジウムの共催や、シンポジウム、セミナー等の被招待者や歓迎会の費用負担等を検討していた。マーシャル諸島から漁業関係者が招待され、シンポジウムが開催されたが、他の資金で賄われ、APICへの支援の要請はなかった。

2. 日・カリブ友好協力事業

（1）西インド諸島大学・大学生招待計画【継続】

太平洋事業と一体として実施している。カリブ地域からは、西インド諸島大学（The University of the West Indies：以下、UWI）の学生5名（ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドス、アンティグア・バーブーダ、セントルシア）を招待した。参加した学生からは、太平洋の学生と同様に、本プログラムについて好評である。これまでの参加者のうち、特にカリブ諸国からの参加者が日本の大学院に進学したり、JETプログラムにより熊本県、鹿児島県、兵庫県、広島県の高校で英語補助教員として来日するなど、大学関係者のみならず現地の議員や大使館からも日本との友好関係に大きく貢献する事業であるという評価を得ている。（太平洋事業（1）参照。）

会場とオンラインで実施した。

（2）国際協力懇話会

不定期開催、少人数を対象とした国際協力懇話会を東京倶楽部にて1回実施した。

4. 留学生奨学金事業

ザビエル高校（ミクロネシア連邦チューク州）は、ミクロネシア連邦が中心ではあるが、パラオ及びマーシャル諸島からも最優秀の生徒が入学する高校で、イエズス会が運営。同高校は、ミクロネシア連邦モリ元大統領やマーシャル諸島デビッド・カプア前大統領等それぞれの国のリーダーとなっている卒業生を多く輩出している。かかる状況に鑑み、APICが上智大学と協力して開始した本件「留学生制度」については、3カ国の首脳の間で極めて高い評価を得ている。

当該留学生協定に基づき、2014年から留学生の支援を開始、既に7名の卒業生を出し、現在4名の学生が在籍している。2025年9月には更にミクロネシア連邦から2名の留学生が入学予定である。APICとしては今後も募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。（なお、APICは旅費、生活費を負担、上智大学は学費、寮費を負担。）

（2）カリブ諸国・記者招待計画【継続】

毎年10月頃に（公財）フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施している。本年度は、カリブの記者2名（バルバドス、ジャマイカ）を招待し太平洋諸国・記者招待計画と一体の事業として実施した。（内容は、太平洋事業（2）参照。）

（3）カリブ諸国・リーダー招待計画【継続】

本年は以下の2グループ10名を招待した。

①カリブ5カ国文化関係者招待計画

2024年10月20日から27日まで日・カリブ交流年2024を記念してカリブ諸国からの文化関係者を訪日招待し、日本での文化交流プログラムを実施。ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、バルバドス、ベリーズから2名ずつ、ハイチから1名、計9名が参加。都内では、デジタルハリウッド大学の高橋光輝教授（当時）からアニメ産業についてのブリーフィング、国際交流基金にて日本文化、日本語、国際交流に関する活動についてのブリーフィング、外務省中南米局長との意見交換を実施し、浅草観光なども行った。地方では、京都にて、文化庁、金閣寺、龍安寺、京都御所、同志社大学、東映太秦映画村などを訪問し、日本の伝統文化や文化財保護についての知識を深めた。また、能楽師河村晴久氏から、河村能舞台で実演しながら能の解説を受けた。金沢では、「雲龍庵」の漆工家・北村辰夫氏の北村工房を訪問し、日本の伝統工芸の緻密な技術について間近で見学し、その後、21世紀美術館にてアート鑑賞、兼六

園、金沢城、ひがし茶屋街を散策した。

②ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局長招待計画

2025年4月2日から9日まで、ジャマイカ外務・貿易省のニコレット・ウイリアムズ二国間関係局長を招待した。都内では、JICA中南米部長との意見交換、東京消防庁本所防災館で防災体験、気象庁において様々な災害のメカニズムとモニタリングシステムの視察、上智大学では、杉村美紀学長、及び大学院地球環境学研究科のブテンカラム教授、黄教授に面会し、留学生制度などについて意見交換を行った。地方では、京都を訪れ、金閣寺、龍安寺、清水寺、錦市場、西陣織会館、などを見学、一方、東北では、震災について学ぶため、宮城県石巻市震災遺構大川小学校、女川町道の駅（シーパルピア女川）、東松島市震災復興伝承館など訪問した。

（4）西インド諸島大学 大学院生支援【継続】

カリブ地域の環境問題に携わる人材の育成を行うことは意義のあることだという観点から、2022年に在バルバドス日本大使館の協力も受け、UWI、上智大学、APICの三者間の協定を締結。これにより、UWIの学長からの推薦があった1名を毎年上智大学大学院地球環境学研究科で受け入れることが可能となった。この制度の目的は、大学院での学びを通して、カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することである。2023年秋に入学したUW

2026 年 1 月 1 日現在
（氏名五十音順・敬称略）

APIC 役員名簿

◆ 役員

理 事 長	重家 俊範	（最終官職：外務省 駐大韓民国特命全権大使）
常 務 理 事	田中 一成	（最終官職：外務省 駐マーシャル諸島共和国特命全権大使）
理 事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会（APIC） 事務局長（最終官職：財務省 国際局付派遣職員（アジア開発銀行職員））
理 事	今野 秀洋	一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長（最終官職：経済産業審議官）
理 事	側嶋 秀展	（最終官職：外務省 駐ミクロネシア連邦特命全権大使）
理 事	鳥飼 玖美子	立教大学 名誉教授
理 事	村上 洋	元 東レ株式会社 取締役／元 味の素株式会社 監査役
理 事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長

監事	金成 憲道	元 ドイツ証券株式会社 取締役会長
監事	吉川 英一	元 株式会社三菱 UFJ 銀行 副頭取

◆ 評議員

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 顧問（最終官職：通商産業審議官）
評議員	島内 憲	元 駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長（最終官職：環境省 事務次官）
評議員	高原 明生	東京女子大学 特別客員教授
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長
評議員	蓑田 秀策	一般財団法人 100 万人のクラシックライブ 代表理事
評議員	森村 潔*	株式会社森村設計 代表取締役会長
評議員	弓削 昭子*	国連訓練調査研究所（UNITAR） 理事

※ 2025 年 9 月 25 日付で新たに就任

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には、毎月開催される外務省幹部・大使等による
APIC 早朝国際情勢講演会へのご案内をお送りしております。
詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場 所 The Okura Tokyo 会議場

時 間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ TEL: 03-5577-2900

EMAIL: apicinfo@apic.or.jp

令和 8 年 1 月 1 日 発行

■ 発行人 重家 俊範

■ 発行所 一般財団法人 国際協力推進協会（APIC）
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12 紀尾井町福田家ビル 3 階
TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901
URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ 編 集 APIC 事務局

ISBN 978-4-911723-23-4